
マーヤの記憶

黒木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マーヤの記憶

【Nコード】

N1547Q

【作者名】

黒木

【あらすじ】

記憶に関する特殊な能力を背負って生きてきた二人、魔綾と瑛司が出会う。

二人の周りで繰り広げられる人間模様、記憶の大切さ、儂さを綴った青春ライトノベル。

辻褃の合わない二つの記憶

今思ってみれば、忘れてしまったこと自体を覚えていることはできないのだと、なぜそんな単純明快、簡単明瞭なことに気付かなかつたのだろうか。

少なくとも当時の俺は、あらゆる分野に関して過剰に信頼を置いてしまっていた。

信頼を置き、真実を遠ざけていた。

誰かに説明を食らったわけでもない、それでいて勝手な解釈をセレクトしてしまっていた。

根拠のないものを嫌う性格だなんて、それはあくまで俺が勝手に個人で設定したものだっただろう。

実際は、気付かないうちに裏付け作業を怠っていた。

故に、彼女　菅原魔綾は不幸極まりない現象に陥ってしまったのだと、それに気付くことは、まあ不可能に近かったにせよ、もうちょっと良い展開に事を運べたのではないかと思うと、なんとも形容し難い、寂寞たる思いである。

それでも、なんとかしようのある現状まで話を進められたのは、やっぱり俺の力ではなく、菅原魔綾とその他の人間が尽力してくれたからで、今となっては全ての関わりに意味があったんだと素直に思う。

結果的に、全ての根源となったその日に記憶を戻せば手っ取り早いのだが、それに至る経緯を話さなければ、あからさまな超展開になってしまうことが訝られるので、とりあえずは1年前、俺が高校2年だった頃まで遡ってみようと思う。

菅原魔綾と出会ったあの日。

俺の高校生活をがらりと変えたあの日である。

？

辻褃の合わない二つの記憶

「記憶」、それは過去に体験したことや覚えたことを、忘れずに心にとめておくこと。辞書にはそう書かれている。

その「心」というものはあまりにも抽象的過ぎる言葉だ。

人の記憶とは一体、体のどこにおさめられているのだろう。

頭だろうか、胸の奥だろうか。あるいは、それらとは別の部分に存在するのかもしれない。

そんなこと考えたところで、果たして意味を見出すことはできるのだろうか。

おそらくは、不可能。

建設的ではない。

誰もがそう諦めて純粹潔白な日常を享受している。あるいは、そんな哲学的なことなんてわざわざ考えてるやつも少ない……か。

でもそんな些細なことが、奇妙な能力を授かった俺にとっては重

要なこと、それさえわかってしまえば、いくら違った人生を送れそうな気がする。

必要のない記憶と必要な記憶。そのふたつを簡単に区分してしまえたらどれだけ楽だろう。

ここのところそんな生産性のないことばかり考えてる気がする。今となつては、それ自体がただの日常に様変わりしてしまつていて、諦めはついているものの、なぜかそこから離れることができないでいる。

そして、その根源となつた出来事。

俺が中学2年の頃に起きた出来事が起因となつている。

話といつても覚えていることはほんのわずかな断片だけ。それが何かの解決の糸口に繋がりそうなわけでもないし、効率性を重視する性格の俺からしてみたらそんなこと、もう忘れてしまえばいい、と自分に言い聞かせている。

ちなみにそのとき授かつた奇妙な能力というやつ、ファンタジーノベルみたいに炎を操れるだとか、モンスターを召喚できるとかいう類なら喜んで受け入れたのだが、中2だからといって厨二病的な恩恵は頂けなかつたみたいだ。

俺に与えられた能力は、「物事、人物を忘却の恐れなく完全に記憶できる」というなんとも使い道に困るものだった。

ちよつとかつこよく言つてみたが、簡単に言えば、卓越した記憶力を手に入れたと言えばピンとくるだろう。

その能力を手に入れてから早2年半が過ぎようとしている。

今のところこれといった不便はない、それどころかこの記憶力を利便的に使う最良の方法を見つけてしまった。

学生は勉強をするのが本業だ。頭の固い教師にそう言われた経験を誰もが持っていることだろう。

勉強というものはほとんどが暗記科目で、公式や応用力が必要なものは限られてくる。

つまりだ　それさえわかってしまえば簡単。

俺はこの記憶力を行使し、勉強においてはもはや敵なし状態のところまで登りついている。

まあもちろん、全国各地にいる、天才と秀才を合わせ持ったようなやつらを凌駕するまでは行かない。あくまで記憶しているだけだからな。

それでも今通っている高校では成績学年トップをキープし続けている。それ以外に特徴らしい特徴はない、平凡な高校生だ。

俺ほど当たり前の日常というものを愛している人間は恐らくほとんどいないだろう。

しかし、どうも嫌な予感がする朝だった。

俺にとつての予感というものはたいていネガティブな状況を暗示している。

そんな今日という日は、高校生活2年目が始まる良い意味でも悪い意味でも記念すべき日だった。

不安ばかりの俺にとつては、悪い意味でしかとらえられないのだが。

そんな確たる立証もできないものを信じるのは俺の性分に反するのだが。

不吉な予感に多少神経質になりながら、20分ほど電車に乗っていると地元の駅から学校の最寄駅に到着した。

都心から良い具合に離れている、電車を使えば1時間足らずで眠らない街へと出向くことができてしまう距離だ。

学校帰りにわざわざそつちまで行くような暇人はいないみたいだが、休日どこかへ遊びに行くとなったらまず電車に乗るという行為がデフォルト。

そんな相変わらずの景色を目の前にしていると、相変わらずの聲が耳に届いた。

まあこれもある意味デフォルトな出来事なのだ。

「新学期早々暗そうな顔してんなー。暗そうっていうか　あからさまに暗い！」

そう言っつて声をかけてきたのは中学からの親友、ほしのまこと星野誠だ。

こいつは紹介するなら一言で済ませることができる。短髪の愉快なスポーツ少年。かといってモブキャラでもない、チヤライ方面に有り余った才能を持ち合わせている男だ。

つまりは、俺と正反対。

朝っぱらから不機嫌そうな表情で制服のポケットに手を突っ込んでいる俺にはあまりにも不似合いな親友。

「おいおい、無視すんなよー。ほんと、常に機嫌悪いよなー瑛司は「春休み明けの最初の挨拶で悪口を言われて無視しないやつがどこにいる」

俺も相変わらずの皮肉たっぷりな口調で返してやった。

まあこいつには通用しないってわかってるんだけどな。

「あれ？　無視も挨拶のうちだ、っていう決め台詞はやめたのか？」

「新学期だからな。心機一転というやつだ」

「心機一転ねえ……一転というほど変わってない気もするけど」

「細かいことは気にするな。脳みそは勉強のときにだけ使ったほうが効率的だぞ」

「勉強かあ……瑛司に言われたら妙に説得力あるんだよなー」

安直な返しに星野はどうやら納得してくれたらしい。

ちよっとした会話のあと、この状況に帰結するのがお決まりパターンだ。

星野と言えば、俺には背負っても背負いきれない恩がある。

もともと人見知りだった俺は高校に入っつてすぐ、根暗なやつだとクラスのみんなから認識されていた。

自分では意識のないことだったが、どうやら風貌や髪型もそれにマッチしているらしい。

なるべく顔を公然の場に晒したくない、という信念に基づいた髪型だと自負しているのだが。

そんな俺でも、少しづつクラスに馴染んでいけたのは、超明るいキヤラの星野と仲が良かったおかげだ。友達の友達は友達、という単純な理論をやつは実現してくれる。

それもごく自然に。

そんな大きすぎる恩をいつか返したいと思つてはいるのだが、あまりにも悩みのなさそうなやつであるが故、そんな機会が訪れる気が全くしない今日この頃だ。

それにそもそも、俺は根っから暗いわけではない　つもりだ…。

「そんなことより、俺はクラス替えという非効率的な定例行事のせいでどうにも本調子で新学年を始められそうにないんだが」

毎年やってくる陰鬱な悩みである。

今日は蓮実^{れんじつ}高校2年生となる記念すべき日だったが、新しい学年になる際の無意味にしか思えない、新生活スタートみたいなノリがどうにも個人的に許せない。

「新しい友達つくるだけっしょ。特に何も変わらないと思うぜ」
こいつは全く進歩のないやつだ。

そりゃあお前にはなんの問題もないだろうよ。

けど俺にとつてクラス替えつてのは政府が動き出してもいいくらの災害レベルだ。

なんせ、またクラスに馴染むのに一苦労しなきゃならないってんだからな。

「あー瑛司^{えいじ}はまた友達づくりの努力をしなきゃいけないのか。まあ去年は大丈夫だったんだし今年は全員が知らない人つてことはないだろうから大丈夫でしょ」

「そういうもんか？」

まあ知り合いは少人数に抑えたほうがいろいろと面倒が少ないかもしれないし特に気にする必要もないかもしれない。

しかし、コミュ力が尋常じゃないお前に言われると逆に説得力がないんだよ！

「まあ、なんとかなるよ。なんとかならないことなんてない」

「なんかむかつく名言だな」

「だろ？」

星野は嬉しそうにそう答える。

むかつく、という形容詞が聞こえなかったのだろうか。

「また散々お前のお世話になるだろうけどな」

「構わないけどさ」。また同じクラスになれるとは限らないぜ」

「安心しろ。去年の担任松本に釘を刺しておいた」

成績学年一位という称号は時として権力にもなりうるのだ。

「相変わらず強引に物事を進めるな」。あと、安心するのはこっち

じゃなくて瑛司のほうだと思っけど」

「ごもつともだ。」

「たまにはまともな反応もできるんだな」

俺はいつでもまともだ、と言い張る星野を軽くあしらいつつ、今となつては不安の象徴にしか見えない学校へととうとう到着してしまつた。

地元でも有数の進学校である蓮実高校は、俺たちが入学してくる年にちょうど再建築された。

そのおかげで校舎はなんとも未来的な姿をしている。

実際に聞いたことはないのだが、地元では「魔法学校」と呼んでいるやつらもいるらしい。

かくいう俺も、そんな校舎に愛着が湧いてきてしまつてはいるのだが、だつてこの外観だけ？

もはや学校じゃないだろこれ。

ファンタジー映画のロケ地選ばれてもさして驚きはしないだろう。

校門をくぐると、緊張と不安を織り交ぜたような寒気がやってきた。

今朝電車の中で感じた嫌な予感を思い出す。

考えすぎかもしれないが嵐がくる前の静けさのような陰鬱さが襲

う。この学校特有のものかもしれない。

変なところで個性を前面に押し出してくる学校だからな。

そんな蓮実高校、建物が乱立しているせいでなんとなく外界から離れた場所にいるような気分させられる独特な雰囲気の敷地内だ。正門を一步出ればすぐに街の喧騒が聞こえてくるのだが、一旦中に入ってしまうとそれを完全に忘れさせられる。

学校で必要のないことは考えるな、ということだろうか。

授業内容とかつてのは普通の学校と変わらない。4月最初の授業つてのは、良いも悪いも胸騒ぎが止まらないってところも同じだ。

まあ個人的には、何事もなく一日が過ぎるのを待とうと思う。

それがあくまで俺のスタイルであって、もし、安定した日常に釘をさすようなイベント事が起きたりでもしたら、理不尽にも俺に恨まれることになる。

「あつ」

何かを思い出したかのように星野が足を止めた。

「どうかしたか？」

「とりあえず瑛司は根暗な性格を改善したほうがいいかもな」

「立ち止まってまで言うことかよ！」

ほんとにこんな感じで大丈夫なんだろうか、俺の新しい学校生活は……。

朝のホームルーム。

なぜか緊張するのは俺だけじゃないはずだ。

手回しておいたかいてもあって、星野とは同じクラスになれたものの、ここ組は知らないやつばかりだ。

担任は去年と同じ松本。授業の腕前に関しては高評価されるべき国語教師らしいが、恐ろしくヘビースモーカーなせいで他の教師に隠れて喫煙している。

その秘密を知っているごく少数の生徒である俺を手元に置いてお

きたかったってのもあるのかもしれない。

まあでも、思った以上に、昨年度と環境は変わっていない。

生憎、席は一番前になってしまったが大きな損害には繋がらないだろう。

新学期ということもあって朝のホームルームはわりとにぎやかだった。

松本も注意する感じの人柄じゃないし、クラスの中核を成すことになりそうなにぎやか（リア充）グループはさぞ心を躍らせていることだろう。

しかし、さつきから気になっているんだがあいつは何者だろうか。斜め後ろからものすごい悪意、いや殺意を持った視線を感じる。ちらつと見てみた感じでは大人しめの男子生徒だ。

悪く言えば、友達がいなさそうなやつ。

ホームルームが終わってすぐ、教室の左端を運良くゲットした星野のもとに向かった。

「なあ、あのメガネの生真面目そうなやつ誰かわかるか？ やたらとにらんできて気持ち悪いんだが」

星野はなーんだそんなことか、と簡単言う。俺にとってはクラスメイトの情報というものはかなり重要なことなんだが。

「あいつは羽賀裕一^{はがゆういち}。成績はお前に次いで学年2位だ。たぶんお前を勝手にライバル視してるんじゃないかな。瑛司ってほら、逆恨みされそうじゃん」

学年1位も楽じゃないねー、と言いながら星野は笑う。

「逆恨みされそう　ね……」

去年の今頃ならそれも優越感で満たされていたことだろう。

しかし、せつかく安定した日常を手に入れた今となっては目ざわり以外の何物でもない。

そんなことで恨まれてはいくら平凡に過ごそうたって無理がある。

進学校で学年1位になるという重みをあらためて実感した。

「文句があればテストで俺に勝てばいいだけの話なのに」

聞こえたらまずいと思いつながら俺は自信たっぷり発言をかましてやった。常に態度をでかく保つ、というのはこれも、俺のポリシーのひとつである。

まあ根っからの本音でもあるのだが。

幸い、羽賀は何も聞こえてなかったようだ。

聞こえていたところで掴みかかってくるようなやつではなさそうだし、もし髪を金に染めているようなやつだったらまず敵にまわそうとは考えつかない。

「まあでも気をつけたほうがいいかもだぜ。あいつの本性を知ってる数少ない、俺からの忠告だ」

「それは一体どういうことだ？」

「聞いちまうのか？」

「聞いちまうていい話なら」

そこまで重大ぶられては聞かないという選択肢はないだろう。

俺は星野の前の空席に腰をかけた。

準備は万端だと目で合図する。

「そんなにやばい話なのか？」

「やばいというか……まあ笑顔で話せるような話じゃあない」

星野は周りを気にするように声のボリュームをおとした。

「俺が中学2年のときの話だ。その頃通ってた塾でな、羽賀裕一と同じクラスだったんだ。それで毎月ある模試でいつも1番だったあいつが珍しく2位になったわけよ。成績的には、全然悪い結果じゃなかったんだ。1番になったやつが、たまたま運良く良い点をとれただけで、でも羽賀のやつはかなり落ち込んだな。いや、落ち込んだというより、何かに対して苛立ってたように見えた。どこかに、いたたまれない感情の矛先を向けるかのように、そしたらあいつは何をしでかしたと思う？」

「悔しさのあまり教室で暴れ出したとか」

「惜しいな。けどもつとひどい」

ひどい。とはどういった意味でひどいのだろうか。

やっぱり、被害者がいるだとか……そういう類か。

「あの野郎、1位になった女の子の腕に思いつきりシャーペンを突き立てやがったんだ」腕にシャーペンを突き立てた……。

心の中で星野の発したその言葉を繰り返す。

それって軽い怪我じゃ済まないだろ。ましてや中学生の細腕にだろ？

想像するだけで嗚咽しそうな光景だ。

「正気じゃ ないな」

そんな言葉しか出てこなかった。

とてもそんなことするようなやつには見えないが、星野が嘘をつく理由もないし、そうなのだろう。

「シャレにならない事件だったぜあれは。いつも無口だったあいつが唯一饒舌になった瞬間だった。何を言ってたかはよく覚えてないけど、とにかくひどい言葉をその子に浴びせてた」

ぞつとする話だ。

普段大人しいやつほど驚くべき本性を隠しているものだとはいく言つものだが、授業中背中を刺されてもしたら笑えたもんじゃやない。なんとも運の悪い席配置なのだろう。教師から一番丸見えの位置という時点で随分不運であるのに。

「それから、どうなったんだ。警察沙汰とかにもなっただろ？」

「いや、そこまで大きくは広がらなかったよ。女の子の両親も、子供の喧嘩みたいなものだからって解釈してたみたいだし。まあ内心はどうだがわからないけど。塾の講師たちも、成績トップの生徒が警察沙汰、なんてことにしたくなかっただろうしな」

「そうか」

成績トップってやっぱりいろいろと複雑な立場だよな。過度に期待されてしまったりするし、そのせいで2位になっただけのことで大きな反動が返ってくる。

俺は今のところ、そこまで大きな被害は出ていないが、そんな平穩がいつまで続くかもわからない。

「しばらくぶりに思い出したよ、羽賀の事件のこと。あいつはそれ以来塾もやめて関わりはなくなっただけど、今思い出してみてもやっぱり怖かったな。今は特に何も問題は起こしてないみたいだから改心したのかもしれないけど……」

「俺を睨んできてるあたり、改心はしてなさそうだけ。少なくとも忌み嫌う対象は変わってなさそうだ」

「もちろんその可能性もある。だから学年1位の瑛司は特に気をつけたほうがいいよ」

羽賀のほうに一瞥くれて、ごくりと生唾を飲み込む。本当にそんな危険性はほらんだやつには見えないけどな。ただの大人しい、一般学生。

「なるべく関わらないっていうのが簡単な対策かな」

「もちろん、そうさせてもらう……」

特に具体的な事件が起きたというわけではないが、幸先の悪い、新学期のスタートだった。新しい友人をつくるどころか、まず自分の身を守ることから始めなければならぬなんて。

護身用ナイフでも持ち歩いたほうがいいかもしれない。

それはそれでバレたら事件だけだ。

でもやっぱり、ほんとに変人が多い学校だと思う。人間関係の凡庸な俺でさえそう思うのだから、星野なんかは特に意識してるはずだ。

言っってしまったえば、校風、とも捉えられるのかもしれないけど、あんまりポジティブに解釈できるようなことだとは思わないな。

とりあえず、羽賀、こいつは徹底マークされないようこっちから徹底マークだ。

授業中以外でやつがシャーペンに手を付ける動作を見つけたら即刻教室から退散しよう。

なんか、非常にダサイ警戒の仕方だな……。

まあ背に腹は代えられない。プライドなんて自己満足以外の何物でもないしな。

羽賀の恐ろしいとも言える過去を聞かされた後、帰りのホームルームがあつて、あつという間に放課後を迎えた。

今日は初日ということもあつて担任からの事務的な話だけで特に授業というものはなかった。

部活に入ってるやつはぱらぱらと散つていき、教室は一気に物静かになる。

と思つていたのも束の間、教室のドアが開くと同時に入ってきた女子生徒の顔を見て、俺は静寂が一気に打ち砕かれるのを容易に予知することができた。

「やつほー！瑛司C組なんだー。はやく新しい友達できると良いねーははは」

恐ろしいほどのテンションで教室に入ってきたやつなかもむらさつきの正体。

それは俺にとっては珍しい女友達の一人、中村紗月だ。

家が近所のせいもあつて幼稚園時代からの幼馴染である。陽気さの度合いでいえば星野さえも軽く上回っている。

「おー俺もC組だぜー。紗月ちゃんは？」

俺の代わりに星野が返事をしたみたいだ。星野と紗月は俺繋がりなかもむらさつきで知り合つたみたいなんだがテンションの相性からして俺よりも星野のほうが気が合つんだらう。

「星野くんも一緒なんだー。瑛司のやつ、なんとか助かつたって感じだね」

なかなか核心をついたことをぬかさじゃねーか。

まあ星野もその辺のことは普通にわかつてるだらうし、ただ、敢えて口に出して言うあたりが紗月の悪いところでもあり良いところでもあるのかもしれない。

俺にとっては悪いの一択になるわけだが。

「あたしはA組だよ！　ほんとにはC組が良かったんだけどね〜」
何言ってるんだか。お前がC組にいたらオレは体がいくつあっても足りん。

「でもここだけの話、C組はがり勉とか交友関係狭そうな人が大量にあふれかえってるクラスって認識されてるらしいよ。登校初日にして」

紗月のどや顔がちらちらとこちらを覗いてくる。

これは皮肉だぞというアピールが憎たらしさ満点だ。

「そりゃあ随分と瑛司がカリスマ性を発揮できそうなクラスになりそうだな」

「おいおい。新学期初日からいきなりそんな認識されてんのかよこのクラスは」

まあさっきの羽賀にしてもそんな感じのやつ多かったかもな。

しかし、そんなことになってくるといよいよ星野にくつついて行動するしかなさそうだ。

「そんなことよりさあ、瑛司は今年も部活やんないの？」

紗月は返答がわかりきっていることを前のめりになりながら聞いてきた。

「やらねーよ。スポーツ自体なんにもできないし、それにどこかに所属したところで慣れ合いごっこみたいなノリばかりだろ？　そんなのには全く興味が湧かねーな」

「またまた性懲りもなくそんな発言を……」

紗月はそう言うが、俺の好き嫌いを熟知しているこいつにとつて、俺の発言はさぞわかりきったものだったことだろう。

それに校風として、この蓮実高校は部活に入っていないやつも少なくはない。

まあ進学校だからというのもあるのだろうか。

かといってバリバリ勉強してるわけでもない俺は真の暇人という感じだ。もちろん、考え事で一日の半分を過ごしてしまう俺にとつては大した問題じゃない。

それが楽しくて生きていられる、なんてのは口には出さないけれど。

いやまあ、そこまではつきりと明言できるほどでもないんだが、それでも体を動かすより脳みそを稼働させるほうが性に合っているのは考えるべくもない。

「まあそれが瑛司らしいし、どっちでもいいけどね。じゃあわたしはもう部活行くけど、星野くんも行くでしょ？」

こいつらはもちろんそれぞれ部活に入って楽しくやってるらしい。紗月は女子テニス部、星野はバスケット部に入っている。

俺は放課後すぐ帰宅してしまうため、こいつらがスポーツに興じてる姿つてのは実は数える程度にしか見たことがないのだが、この二人はやっぱり部活でもわいわいできてるんだろな。

「俺もそろそろ行くよ。瑛司はまあ帰って勉強だよな」

「勉強なんかしねーよ。まあ今日も一人でさみしく帰るとする」

「はいはい、じゃあまた明日な」

そう言って星野と紗月は教室を後にした。

勉強なんかしねーよ、という言葉はこの二人にとってはただの皮肉にしか聞こえないかもしれない。

学年1位のやつが勉強してないなんてこと普通はありえない。

でも俺は実際勉強なんてほとんどしたことがない。

まあ授業くらいはちゃんと聞いているが、高校の勉強なんて大半が暗記、つまりは、俺にとっちゃ日常生活を送っているだけでそれを容易に達成できてしまうというわけだ。

天才でも秀才でもない。

他人が俺のことをどう認識してるのかは知らないが、あいつは天才か秀才か、なんていちいち気にするやつもないだろう。

だるそうにしながら、俺は一人だけになった教室を出た。そしてそのまま、いつも通りの帰路を辿っていつも通りの放課後を終える。そのつもりだったんだが

何か普通ではない出来事が起きているのを見ると、すぐ食らいつきたくなるこの性格はなんとかしたいものだ。

他人には興味はないが、他人事には興味がある。

俺は階段を気持ち早足で降りて正門が見えるところまでやってきた。

何やら5、6人の女子が盛大に騒いでいるらしい。

それに群がるギャラリィはざっと10人程度だ。あまり良い予感はない。

もしかするとこれが、朝電車の中で感じた胸騒ぎの正体かもしれない。

だが、普通に考えれば俺が巻き込まれる理由なんてどこにもないはずだ。

この記憶力を手にして以来、普通に考えたら、なんて言葉は気休めにしか聞こえなくなってしまうただけだ。

にしてもやれやれだな、女子の喧嘩は男子の喧嘩の何倍もめんどくさい。

紗月にいろいろと話を聞いている点、そこらへんの事情には詳しくなかった。

この学年はAからDクラスまで存在する。去年はどうやらD組に女子の大きな派閥が二つ居合わせてしまったらしいが、紗月はDクラスだった所為でそれに巻き込まれたりもしたそうだ。

女子の派閥は政治家のそれらよりも複雑で恐ろしいものだとよく言われているが、本当にその通りだと思う。

今期に入って、その二つの派閥がどのクラスに移動したのかは知らないが、是非C組以外であることを願うばかりだ。

そんなことを考えていた。

考えていただけのつもりなんだが

いつの間にか、俺は10人程度いたギャラリィの中の一人に加わっていた。

自然が成す行為とは恐ろしいものだ。

そして、俺が男子で先頭をきつたせい、女子だけでなく男子もギャラリーに加わり始めた。

簡潔に言うとな………かなりミスった。

男子は女子の抗争に巻き込まれることだけは避けておかなければならない。

大半の男子もそう同じ考えだろう。まあギャラリーに加わったくらいで、巻き込まれるなんてことはないと思うんだが………それでもやはりスル しておくに越したことはなかったと思う。

でもまあ、俺が先陣を切らずともいずれこの状況に帰結していたのではないだろうか。

この女子同士の喧騒の中でその中心に立っている女子生徒、そいつを見ると、その男たちの注意をそらすことが不可能なのがわかるからだ。

見事なほどの美女。

スラッと背が高く、日本人離れたスタイルをも持ち合わせている。

だが、その美女は数人の女子に囲まれ、何やら怒りを買っているようだった。

状況的には1対5〜6。

正門の前という、こんな目立つ場所であつたか………の喧嘩ってどうなんだろう………。

それほどにまで急を要する怒りの原因があるとしてもいづののだろうか。

しかしそんなことはどうでもいい。そんなことより、俺の脳はウイルスが入ってきたかのように、今の状況に拒否反応を示している。拒否というよりは疑問。

そして、あまりにも久しい感情でもあつた。

完全なる記憶力を手に入れて以来、こんな状況に陥ることはなかった、そしてこれからも、おそらくはないだろうと思っていたのだが

美女の正体が不明なのである。

絶対絶命的な状況に置かれているそんな美女に、俺は見覚えがなかった。

一度見た人は必ず覚えているはずのこの記憶に、彼女は存在して
いないのだ。

俺の彼女に対する反応は他の男子とは随分異なったものだっただ
ろう。

大半の男子は彼女の圧倒的なルックスに目を奪われているのだろ
うけど、俺にとってはそんなことは些細なことに他ならなかった。

俺が見覚えのない人物がこの学校にいるわけがない。

別のクラスの人であろうが、関わったことが一切ない人であるう
が、必ず「記憶」の中に収められているはずだ。

もし、俺が本当にこの容姿端麗の美女を覚えていないんだとした
ら、今まで1年間で全く見たことも聞いたこともない人物とい
うことになる。同じ学校の生徒でそんなことってあるか？

転校生がきたってという話も聞いていない。それくらいは交友関係
の狭い俺にだって噂くらいは聞こえてくるはずだ。

それに、周りの連中は俺と同じく2年の女子たちだ。つまりは、
例の美女も2年であると考えていいだろう。それで記憶に残ってい
ないのはおかしい、おかしすぎる。

これは意地でもこの争いの結末を最後まで見届ける必要があるな。
矛盾を取り除く為だ。

偶然に偶然が重なり合って彼女を見たことも聞いたこともない、
ということもあるかもしれない。

分析タイムの始まりだ。まずは事の発端と関わっている人物の詳
細を会話の文脈から判断しよう。

「あんた一体自分が何を言ってるかわかってるの？」

この発言を繰り返り出したのは、去年の生徒会長選挙に立候補し、驚
くほどの大差をつけられて敗北を喫した野口裕子だ。

本人は、誰かが不正を働いたと言い張っているが、もちろん教師たちはそんな戯言にいちいち構ってられるかと言って相手にしてないみたいだ。そこらへんの事情まではよく知らないし、関わらないに越したことはない。

黒髪ロングでまあまあるルックスもいけてる部類に入るのだが、性格がきつすぎるせいでどうにも女子の抗争の際に必ず名前が挙がる人物である。

所謂、お嬢様系女番長といった感じだ。

「私は真実を述べているだけよ。誰の言っていることも私の記憶とは一切つじつまが合わない。覚えていないわ」

こいつが例の圧倒的ルックスの持ち主だ。

記憶とのつじつまが合わない？

それはこっちのセリフだろ。あんたはいつ俺の記憶からすり抜けることができたんだ。

「まだそんな意味不明なこと言ってるの？ 人を傷つけておいて、覚えてないから仕方なかったーなんて言うつもり？ 人としてどうなのよそれ。ろくな言い訳もできてない癖に、まだそんな態度を続けるつもりなの？」

野口裕子は美女に一步步み寄り、言う。

正論……のように聞こえるが実際のところどうなのだろう。野口側の味方になっていいる人数を見る限りでも、やはり正論だとは思えないが、それだけ論破されて尚、反抗する彼女は一体どうするつもりなのだろうか。

「人の事情も知らないでいちいち口を挟まないでくれる？ なんてあんたがしゃしゃりでてくる必要があるわけ？」

「ふーん、あんたってほんつと最低ね！ もうあんた明日から友達いないわよ。覚悟してなさい」

野口裕子は女子の中で圧倒的な権力を持っている。

今起きていることを女子全体に言いふらすと暗に言っているのだから。

言い方でわかる。冗談ではない本気の口調だ。

「もちろん。そんなこと言われなくてもわかってる」

いろんな感情を抑えようとしすぎて、それが裏目に出ている。

逆にいろんなものが伝わってきてしまっ、そんな声で彼女は言った。

顔は蒼白に満ち、絶望とまでは言わないが、それに似た感情。

そのセリフを最後に、そいつはギャラリーの間をすり抜け、急いで正門を飛び出していった。

その走り去って行く姿は悲しげな様相で、風にたなびく明るいクリーム色の長い髪がそれをより誇張させていた。それに多くの男子は見とれてしまったことだろう。

「何あいつ。自分がどれだけ最低なことをしたのか気づいてないのかしら。反省するつもりなんて全くないみたい」

野口裕子のその一言を最後に、その騒ぎはとりあえず事を落ち着かせたようだ。

まあ当事者がいなくなってしまうえばそれは当たり前か。

喧騒の中ばかりに気をとられていたが、よくよく見てみると、女子たちに慰められながらもしゃがみこんでしまっている子が目についた。

彼女は泣いているようだ。

単純に判断すると、走り去っていったあの女が泣かせたんだろう。

それは間接的に、なのか直接的に、なのかは不明だが。

しかしまあ、よく登校初日からこんなに騒げるものだ。俺なんてのはさっさと家に帰りたいの一心だけだな。

どうにも、女子ってのは良くわからん生き物だ。

普段通りの俺なら、これから真っ直ぐ家に帰るはずだった。

けど、走り去っていったあの女の正体がどうしても気になってしまった。

直感的なものもあるが、それ以上に、なぜ俺の記憶の中に顕在してないのか気になるっていうのが一番の原因だ。

あの女からは何か不思議なオーラを感じる。

俺も周りからよく、「不思議なオーラ醸し出してるよね」なんてのはしょっちゅう言われるんだが、あいつの場合は本気のオーラだ。俺みたいなかからかわれる類のものとは違う。

もしかしたら、天から降ってきた天使なのかもしれない。

いや、違うな。

天から降ってきた天使が登校初日に正門の前でひと悶着起こしたりするか？

相当気の荒れてる天使でもそんなことはまずしないだろう。

いや、墮天使ならあり得るか。

墮天使ねえ。

厨二臭いから今の思考はなしにしておこう。

しかし、どうしたもんだろうか。

今の事件のことが頭から離れない。思春期の高校生がちよつと喧嘩してただけのこと。そんなこと今までいくらでも見てきたはずなのに。

部活に入っていない人たちはもうほとんど下校を済ましている。あとは部活組の練習中の声が校庭のほうから聞こえてくるだけだ。

正門の前をうろろしながら頭を抱えている俺はさぞ不気味に見えることだろう。もし制服を着ていなかったら不審者に間違えられていたかもしれない。実際、監視人の俺を見る目は一般生徒を見るそれとは幾分違っていた。

そして、考えれば考えるほど深い溝にはまってしまった俺は、星野たちに今の事件のことを話してみようと考えた。

星野なら、少なくとも俺よりは、人間関係に詳しいだろう。

今日はバスケット部がグラウンドで練習している日だ。部活数のやたら多い蓮実高校では常日頃から練習場所の取り合いが絶えない。単に曜日毎に分ければいいと思うのだが、なぜかうちの学校はそういう安直なシステムを嫌い、部員の成績の平均が高いほうが、優先して使用したい場所が使えるようになってる。

スポーツ重視の学校が聞いたらさぞ目を丸くすることだろう。

バスケット部が練習しているグラウンドに行ってみると、ちょうど星野はベンチに座って休憩をとっているようだった。

思い返してみると、部活中の星野を見るのはまだ手で数えられる程度の回数だ。あいつの真面目な表情を見るとどうにも別人に見えるてしまう。

「おい星野！」

部活中の星野に大声で叫ぶと、同じバスケット部のやつらが不審な目で俺を見てくる。人間てのは声ができるほうをつい見てしまう生き物だ。

んなこといちいち気にしてるのも俺くらいか。

「なんだ瑛司か！　なんでこんな時間まで学校にいるんだー」

「ちょっと話したいことがあるんだ。部活後、時間大丈夫か？」

「おーわかった、あと30分くらいで終わるよ。教室で待っててくれ」

了解。と言ってその場を去った。部活組の連中とはなるべく関わりたいくない。というより、関わるべきでない気がする。まあ悪いやつらってわけじゃないんだが、なんだが気が合わない。

そう考えると、今年のC組は本当に俺にマッチしたクラスだったのかもしれない。

にしても、部活終了時間までたつたあと30分か。

俺は随分正門の前で時間を食っていたようだ。

さっきの騒動は一体どれくらいの時間行われていたんだろう。

俺がギャラリーに加わったときにはすでに終盤をむかえていたよ。うだし、まあそんなこと気にしても仕方ないか。

一旦考えるのやめて大人しく教室に向かうことにしよう。

といっても、教室に戻るだけで一定の体力を消費してしまうのがこの学校の厄介（無駄）なところである。

この蓮実高校は「魔法学校」と呼ばれているだけあって妙な構造

になっている。

普通の校舎ならだいたい長方形が何個がそびえたっているような感じだろう。

だけどこの学校は意味もなく複雑な構造だ。

正門の前にはちよつとした広場があり、左右にはまあまあ広い校庭が二つある。正門から広場を抜けて真っ直ぐ歩くと、円形の校舎がまず顔を見せる。

この校舎の階段は驚きの螺旋階段になっていて、ぐるぐる回りながら各教室が点在している。

これはもう明らかに建築士が遊び心を発散させたに違いない。コンセプトとしては、授業中全クラスが中心を向いてお互いを高め合うように勉学に励む様、というのをイメージしたらしい。これは間違いなく後付けだろうと思う。

そしてその校舎の後ろに位置するのは、もはや教会としか呼べないような校舎だ。

ここに職員室や生徒会室など、重要な機関と叫びたら大袈裟だが、そのような部屋が配置されている。

この学校の偏差値が去年からやたら高くなったのは、この妙な校舎で3年間を過ごしてみたいと思った楽観的、短絡的な中学生が多かったからだろう。

まあ俺も人のことは言えない。

同じような偏差値の高校が家の近所にあるにも関わらずここに入ったのだから。

しかしまあ、星野や紗月がもし同じ蓮実高校に入っていなかったらと考えると毎度ぞつとする。

知り合いが皆無の状態が始まる新生活ってのは、トイレ、風呂、キッチンがない家に住み始めるようなものだ。

「お、嘉神^{かがみ}じゃないか。お前が放課後まで残ってるなんて珍しいな」螺旋階段を上っていると、タバコをふかしながら降りてくる担任松本に出くわした。

相変わらず喫煙マナーを守るつもりはなさそうだ。

「おいおいまた校内でタバコ吸ってんのかよ。校長に見つかったらクビになるぞ」

「はっはっは。公務員にクビはないんだよクビは」

何がそんなにもしろいのか、腹を抱えて笑う松本はこっちの気力さえ奪っていく。

「つってもうちは私立だ。飛ばされることくらいあるだろ。それにタバコを校舎で吸う教師って、新聞に載るレベルだぞ」

間違いない正論だと思う。

校舎内で吸ってることに合わせて、歩きタバコまでしてるわけだからな。

「またお前は堅苦しいことばかり言うな。勉強のしすぎじゃないか？」

担任の教師でさえ、俺の成績は努力で勝ち得たものだと思ってる。

大人、教師は得に天才という存在を認めたららない。教育上、秀才と呼ぶほうが良いからだろう。松本に関しては特に深くまで考えているわけではないんだろうが、それでも良い方を自然と選択してしまうのも無理もない。

「勉強の話はやめてくれ、不愉快だ」

「相変わらずきつい言い方をするのな、お前は。一応俺は教師なんだがな。まあいい、それで教室に忘れものでもしたんだったか？」

「んなこと一言も言ってねーけどな。まあちよどいい、ちよつと聞きたいことがある」

俺はさっきの騒動のことを思い出した。

生徒のことなら教師に聞くのが手っ取り早い。

「おうなんだ。勉強のこと以外ならなんでも聞くぞ」

「教師なんだから勉強のことを中心に聞けよ！」

「高校の勉強なんて教科書見ればだいたい載ってるさ。それで聞きたいことってなんだ嘉神」

少し咳払いをして仕切り直す。

「髪がクリーム色の長髪で、ちょっと長身でキリッとした顔立ちの女子知ってるか？ たぶん2年だと思っただが」

松本はうんと首を傾げて聞こえない声でぶつぶつとつぶやいてる。本当に考えているのかどうかは怪しいところだ。

すがはらまあや
「菅原魔綾のことか？」

「菅原魔綾っていつのか……」

菅原魔綾……全くもって聞いたことのない名前だ。まあ名字に関しては一般的ではあるが、下の名前は一度聞いたら忘れるのが難しい。そうだ。

そして俺に関していえば、一度覚えれば忘れるわけがない。

「菅原がどうかしたのか？ ……あ、まさか狙ってるのか？ やめとけやめとけ。あいつは高根の花だぞ。お前みたいな根暗ガリ勉には目もくれないだろうよ」

「教師のあんたにそんなこと言われたくねーよ！ てか狙ってるわけじゃない。ちょっと気になることがあったただけだ」

「ほーう。お前が人に関心を持つなんて珍しいな」

「自分を知る上で、他人を知ること重要だからな」

「はーん。よくわからんが、問題だけは起こすなよ」

問題なんて俺が起こしたことあるか？ と言いたいところだったが松本はタバコを携帯灰皿に処理すると足早に階段を降りていった。そんな、効率性を全く憂慮していない螺旋階段をあと数メートル上がると、俺が所属するC組がある。

教室の中は至って普通の学校と変わらないが、相変わらず螺旋階段の先にあるってのがどうにも不自然だ。

まあ普通の高校に行っていたところで俺は何も得るものはなかっただろう。自分自身が普通過ぎるせいだな。

しばらく教室で待っていると、星野がいつもの楽しそうな顔でガ

ラガラと教室のドアを開けて入ってきた。

「どうやら走ってきたらしい。息を切らしている。」

「なんでお前そんなに息切れしてんだよ」

「放課後学校に残ってる瑛司なんて1年に何回見れるかわかんないからさ！ 部活終わりである階段をダッシュするのはさすがにきつかったけど……」

階段を歩いて登るだけで息切れしてしまう俺に対する皮肉にしか聞こえない。

もちろん星野誠という単純生物に、皮肉を言うようなインテリジエンスがあるとも思えないが。

「んで、一体どうしたどうした？ 登校初日からいきなり悩みごとか？」

「いや、別に大したことじゃないんだが」

「なんと言えばいいんだろう。」

間違いなく悩み事って類じゃないが、俺の秘密を知らない星野に言ったところでうやむやになるのがオチかもしれない。

それでも、自分の中だけに仕舞い込んでおくというのは、やっぱり相当の心労を生む。誰かに話す、ということは非常に重要なことだ。

「気になることがあってな」

「一体なんだなんだ。俺でよければ相談にのるぜ！」

「なんだその元気な決め台詞は……ここで相談に乗らないとか言われたとしてもこっちとしたら意味不明だし。」

「とりあえず一息おいて、松本に聞いた通り、主要人物のフルネームを思い返した。」

「お前、菅原魔綾ってやつ知ってるか？」

「あー、菅原さんなら俺らと同じ組になってたぞ。去年は二日に一回は学校休んでたらしくて認知度は低いらしいけど、今日見てみたら相当の美人だった。あれはすぐに男子から人気が出そうだな」

「二日に一回は休んでいた……か。」

それだけでは記憶に残っていないことを裏付ける理由にはならない。ほとんど顔を出すことのない校舎の清掃員だつて覚えてるんだ。欠席が多い程度の生徒を見てないなんてことはまず考えられない。それにあれだけの美人だ。仮に記憶力が常人レベルだったとしてもなかなか忘れることはできないだろう。

「で、菅原さんがどうかしたのか？ 瑛司が人に関心を持つなんて珍しいな」

教師と親友に同じことを言われる俺つて……。

「あ、もしかして」

星野の顔を見て、だいたい何を言おうとしているのか理解した。全力で否定つつこみを入れる準備をしておこう。

「狙つてんの？」

「狙つてない」

我ながら褒め称えるべきスピードつつこみだった。

しかしお前までそういう方向に解釈するか……。まったく最近の若者ときたら。

まあ松本は若者じゃないが、同じようなもんだろう。

「なんだよー。女子のことを聞かれたら普通そう思うじゃん」

「相変わらず単純思考だな。説明してもお前にはわかんないだろう。とりあえず必要な情報は手に入ったよ。感謝しとく」

「おいおいおいおいー！ 結局その菅原さんがどうしたんだよ。俺にも教えられないようなことか？」

「また気が向いたら話すよ」

できれば星野にだけは話したかった。秘密を打ち明けようと思つたことは何度もあるし、これからもその葛藤に苦しむだろう。

けれど、もし親友の記憶力が尋常じゃないなんて知ったらどう思うか。仮に信じてくれたら話だが。

きつと、知りたくなかつたと思うだろう。

星野なら俺の助けになつてくれようとするかもしれない。

いや、きつとそうしようとしてくれる。

けれど、心の隅では複雑な感情が渦巻くはずだ。今まで普通に接してきた親友が、普通ではなかったことを知り、自分は何をすべきか、どう接する悩むだろう。

見事なほど能天気キャラな星野だが、本質的には気の使える裏の功労者だなんてこととつくの前から気付いている。

そんなこいつを無意味に悩ませたくはない。それがもし、俺にとつてプラスに働いたとしてもだ。

そのとき、教室のドアが勢いよく音をたてて開いた。

このドアの開き方からすると……。

「おーやつぱまだ帰ってなかったんだねー。星野くんが階段上がっていくのが見えたからもしかしたら瑛司もいるんじゃないかーって思ったんだ！」

この時間では珍しいが、轟音の正体はいつも通り、紗月だった。

こいつもこいつで、ある意味相当な暇人なのかもしれない。

「そんで、一体何のようだ？ 遊びにきたんだったら朝だけで勘弁してくれよ。取り込み中だ」

「あたしがそんな単純野郎に見えますか？」

「見える。そして、野郎というのは男に対する呼称だ」

「屁理屈はよろしい！ 今回はちゃんとした用事を持ってきたの！」

もし本当にまともな用事なのだとすれば、紗月からまともな話を聞くのは数年ぶりになるかもしれない。

それほど、常にちゃらんぽらんとしている。男子でこいついうやつはたまに見かけるが、女子ではなかない人種だろう。

ある意味、貴重種。

貴重といっても、もう飽きてしまった、というのが本音だ。

「まあ俺たちの話はひと段落したわけだし、話聞いてあげようぜ」

「さっすが星野くん！ わかってらっしゃる！」

「でしょでしょ！」

「ですです！」

相変わらず、無意味なやりとりが多いやつらだった。

「で、ひと段落って何を話してたのー？」

「男だけの秘密だ」

「び……BL？」

「断じて違う！」

BLなんて言葉を日常で使うやついたのか。無論、なんの参考にもならない情報である。

まあ星野に聞きたかったのは菅原魔綾の情報で、それは一応聞けたからひと段落したと言えばそうなのか。

だが紗月の話が今の俺にとって有益になるかと言えばたぶんならない。そう考えると、もうしばらく星野からの情報収集に努めたいところなんだが。

「世間話はそのへんにして、そろそろわたしを登場させてもらえる？」

聞き覚えのある声に、一瞬脳内の記憶が一回転したような感覚に苛まれた。

紗月の横から現れた人影。

この世の全てを掌握しているようなキリツとした表情。

クリーム色のしなやかで長い髪。

日本人離れたスレンダー体系。

実際に目にしたことはないが、天使がいるのだとしたら、おそらくこんな姿をしているのだろう。

噂をすれば、というのはいくらか少し軽薄過ぎるかもしれないが、タイミング的にはそんな感じ。

俺が珍しく放課後の校舎に残っている理由の根源。

菅原魔綾がそこにいた。

「あーごめんごめん菅原さん。瑛司が屁理屈ばっか言うから熱くなっちゃって……へへ」

「屁理屈じゃなくて、正論と言ってもらいたいんだがな」

動揺すれば不自然だ。ここは平然を装い、いかにも普通の男子生徒であることをアピールしておこう。

いや、アピールしなくても俺は普通の男子生徒なのだった。

「おい、やっぱり菅原さんと何かあったのか？ タイミング的におかしいだろ」

俺だけに聞こえるよう、星野が耳打ちをする。

「いや、実際本人と関わったことはないよ」

「じゃあなんで……まさか、瑛司に勉強を聞ききたなんてことはないよな。あんな美女が」

「なんで美女が俺に勉強を聞くと不自然なんだ！」

菅原はイラツとした顔で俺たちを見つめている。

調子に乗りすぎたかもしれない、そろそろ彼女がなんでここに来たのかを聞かないと……。

「こらーそこ！ 二人でしゃべってないで！ 用事ってのはね、菅原さんが、瑛司に会いたいわって言うから連れてきたのよ。あたしがよくC組に出入りするのを見てみたいで。あたしってわりと有名人なのね〜ふふっ」

教室によく出入りするから見たって言うてんのに、有名人だということを立証する証言は全くなかったぞ。

「まあそういうことだから、あとは本人と直接話して〜。はい、菅原さんどうぞ！」

ということらしい。

なぜこんなにもちょうどいいタイミングで……いや、それより俺と話したい理由のほうが重要だ。

あいつ、さっきの騒動のあと、走って正門を飛び出していったじゃないか。

わざわざ学校に戻ってきてまで、俺と話す必要があったってことか？

それは記憶から菅原魔綾が消えているという謎の現象と関係があるのだろうか。

それとも、俺の記憶力について知ってしまったとか……。

いや、あり得ない、あいつと関わるのはこれが初めてで、菅原魔

綾が常人である限り俺のことなんて知らないはずだ。

成績トップという情報で仮に知っていて、勉強について何か質問があったとしても、それは今日中に済まさなければいけないという理由にはならない。

そして、紗月から要領の得ない紹介をされた菅原と俺の間には、とてつもなく微妙な空気が流れていた。

「あなたに話があるわ」

菅原のその一言はあまりにもぶっきらぼうで感情がこもっているのかどうか疑わしかった。仮に感情がそこにあつたとしても、それはネガティブな感情に間違いない。

そしてそれは明らかに理不尽だと思う。

しかし、その目はまぎれもなく俺の方向を見ている。

「あんた」というその対照物はこの俺らしい。

あまりにもぶっきらぼうな言い方だったせいで一瞬これは夢なのではないかと疑ってしまった。

だけどこれは言い逃れのできない現実であつて、さっきまでちょうど話題に上がっていた菅原魔綾は俺の目線の先にいる。

「一体俺なんか何の用があるんだ？」

当たり前のことだが、それを聞かなければ話にならない。

「ちよつと聞きたいことがあるの。屋上まで来て」

「聞きたいこと？ おい、まさか本当に勉強を聞きたいとか言うん

じゃ

「いいから。5分以内にきて」

「お、おう……」

くだらない質問なんぞするんじゃない。という心の声が伝わってきた。どうやら勉強について聞きに来たわけではないらしい。

まあ当たり前か……こんな大袈裟な登場をしておいて、数学でわからない問題があるの、なんて言い出すようなギャグセンスの持ち主には見えない。

菅原はツンとした表情のまま、じゃあ先に行ってるから、とだけ

言い残して教室を後にした。

5分以内に、と言っていたが、これは急すぎる展開を整理するために与えられた俺への猶予だろうか。

そうだとしたら5分じゃ短すぎる。

そんな文句を言ったところで、聞いてくれるような相手だとは思わないが。

「屋上つて……告白スポットナンバーワンじゃん」

紗月が妙なことを言い出した。

「たしかにたしかに！ 放課後の屋上つて言えばそれしかないでしょ！ よかつたなー瑛司。やっと春らしくなってきたって感じ？」

この学校の生徒は、告白するためにわざわざあの長い螺旋階段をせつせと上ってるのかよ。

「あのなー。今の感じで告白なわけないだろ。たぶん、俺の成績トップというコネを使って教師を脅したい。とかそんな感じだろ」

もしそうだとしたらまっさきにチクってやるつもりだが。

「まあ瑛司に限ってそんなのあるわけないかーはは」

「だなー。瑛司に限って、春に春らしい高校ライフを送るなんてことあり得ない！」

「切り替え早いなおい！」

それに、俺に限ってと言うよりも、あいつに限って告白なんてしてくるはずがない、と言ってほしかったものだ。

いや違うな。

そもそも、初対面で愛を打ち明けることが非常識的だと考えつかないお前らはおかしい！

「友達もなかなかできないのに、恋人だけできちゃう、なんてメンヘライケメンにありがちなことが瑛司に当てはまるとは思えないしね」

「お前らがそういうことを言うത്無駄に殺傷力があるんだよ！ 気をつける！」

こつこつ言葉返すとこのリア充共は必ず高笑いを始める。

このパターンがやつらのお気に入りであることは重々承知なんだが、ある意味トラウマになってるせいで過剰反応してしまう。

「まあとりあえず早めに行ったほうがいいと思うぜ。ほら、5分以内って言うてたたる？」

「そうだな。もし5分経過後に行ってしまったときには、二度と病院から出られない状態にされてしまいそうだ」

そんなことを言つて、俺は重たい腰を持ち上げる。

人間は生まれながらにして重力の下に存在するため、普段は重力によって生じる圧力を意識することはない。だが、今だけはその圧力を感じることができた。

屋上に行くな、そう体が拒否反応を示しているのだろう。

「健闘祈ってるね」

「うむ……」

何に対して健闘すればいいのかわからないまま、静かに教室を出た。

この螺旋階段をもう3階分のぼると屋上に続く扉が現れる。そこには間違いなく菅原が待っている。

こんな展開、誰が予想できただろう。

けれどこれは逆に都合だったのかもしれない。

俺は菅原の素性を少なくとも知りたがっていた。ていうか、知らなければいけない気がした。

その感情はどこからきているのかはよくわからない。とにかく、会って話しをするのが先決のようだ。

それを、都合が良いのか悪いのか、向こうから切り出したんだからどうしようもない。

屋上へと続くこの階段は、窓が少なく、足元が見える程度にしか照らされていない。特に放課後ともなつてくるとそれさえ危うくなってくるほど暗いのだ。

人間の心の奥深くにいるような、そんな妙な感情に陥ってしまう。唯一大きく見える光。それは屋上への扉だ。

ガラス張りにつくられているこのドアからは大きな光が差し込んでくる。詩人なら、まるで天国への近道のようにだ、なんて形容するのもかもしれない。

「けどあそこは天国じゃない。」

少なくとも今の俺にとっては、そんな美しい世界が待っているとは到底思えない。

なぜならあそこには、100%間違いなく菅原魔綾がいるからで、その菅原魔綾は俺にとってネガティブな要素になる。

いや、断定はできないんだが……。

今朝の嫌な予感的中するのだとしたら、あの扉の先でのことに間違いはないだろう。

階段をのぼる作業は瞬く間に終わりを告げた。もう目の前には屋上の扉がそびえ立っている。

俺はゆっくりとその扉を開けた。

ゆっくり過ぎるほどゆっくりと

彼女はもちろん、そこにいた。

菅原魔綾は手すりに腕を置き、何か悲しげな様相でたたずんでいる。

風が彼女の長い髪をそつと揺らす。その光景は「美しい」という一言でおさまることを認めざるを得なかった。
「なんというか

これほど荘厳な雰囲気を持った美女は他にいないんじゃないかと思っただけだった。」

「やっときた。とっくに5分過ぎてるけど」

菅原は俺の姿を見つけて安堵の表情を浮かべているように見えた。俺が、いつまでたっても来ないんじゃないかと考えていたのかもしれない。

いやまさか、こいつがそんな小さな小さな心配事をするようなやつには見えない。

「5分つてのが短すぎるな。俺の脆弱な脚じゃ階段をのぼるのも一苦勞だ」

一体何を言っているんだろうか。

普段、屁理屈と皮肉ばかり言っているせいか、ほどよいトーンで会話することが困難になっているのかもしれない。

とくにこの女、菅原魔綾の前ではそれがなぜか難しい。

一応初対面であるのだから丁寧な言葉を使うべきなのだろうけど、それでもそんな気遣いが不必要だと思わせる空気があった。発生源はわからない。

けれど彼女に前に立つと、以前会ったことがあるような気さえする。

記憶に残ってない以上、それはあり得ないのだけれど。

そんな曖昧模糊とした感情が渦巻いてる最中、初対面とは思えないような毒舌が脳に突き刺さった。

「貧弱なのが足だけならいいのだけど、これからわたしが話すことを理解できる脳みそは持つてる？」

「話をまだ聞いてないのに答えようがないだろ、それ」

「ちゃんと正論を言えるのね。安心した」

試してたつてのかわよ……。

どれだけ俺を見下してんだこの女。

「言っとくけど俺は」

「成績学年トップ」

彼女は俺のことを知っているらしい。

俺は彼女のことを何も知らないけど、彼女は俺を知っている。

当たり前か、じゃないとわざわざ呼び出したりする意味がわからない。

「現在C組、出席番号11番、部活には所属していない、口が悪い」
俺の情報だった。

同じ学校、クラスの人間なら知っていてもおかしくない内容だ。わざわざ箇条書きにしたように言い並べる必要もなさそうな情報。

口が悪いってのはお前もだろ、と言いたくなつたが菅原の真剣な顔を見た感じではスルーしておいたほうが良さそうだ。

「この情報に間違いはないわね？ 嘉神瑛司くん」

「間違いはないよ。最後のは少し反論の余地がありそうだが……。そうだな、間違いはない」

「じゃあ、なぜわたしはあんたのことを知っているの」

疑問形……なんだろうか。

俺に、というよりは世界全体に問いただしていているように聞こえる。

「おかしなことを言うやつだな。それくらいの情報ならたまたま知つてもおかしくないだろ。同じ学校の生徒なら」

野暮なことを言ったかもしれない。

同じ学校の生徒なら。

俺もそうだった。

同じ学校の生徒なら菅原魔綾を一度は必ず見ているはず。

実際、菅原魔綾以外の生徒は全員、記憶の中にちゃんと収められている。

そして彼女は今、俺を知っていることに対して疑問を抱いている。

「お前、記憶に関して何かおかしな状態にあるんだな？」

「話が早いわね。さすが学年トップ」

いちいち気に障ることを言わなきゃ気が済まないのかこいつは。

「じゃあ話してみるよ。じゃないと先に進まない。お前は一体どういう現象に陥っているんだ？」

「もちろん。その為に呼んだんだし。ただその前に、あんたのことも話さない」

全てを見透かしたかのような口調で菅原は言う。俺も普通ではない、ということはもうすでに知っているのだろうか。

いや、知っているというよりは、わかっている、と言ったほうがいいのかもれない。

なぜなら、それはお互い様だからだ。

しかし、さっき初めて言葉を交わしたばかりのこの女に話してい

いのだろうか。

高速フル回転で脳を稼働し、考えてみる。

でもすでに答えは出ていた。

直感で行動するのもたまには良いだろう。自分らしくないからと言って行動を制限するのはきつと間違ってる。

「俺は見たもの、聞いたものを簡単に、そしてほぼ完全に覚えてい
ることが出来る。一般人には想像もつかないほどの記憶力だ。成績
が学年トップなのもそのおかげ。特に勉強しているわけでもないの
に頭の中にすらすらと授業と教科書の内容が入ってくる。この能力
がどんなふうにして身に付いたのかはよく覚えてない。肝心なこと
だけ忘れてしまってるわけだ」

胸の奥に抱えていた秘密全てを菅原に話した。普通の人が聞いた
って俺の頭が狂っていると思うだろう。

でもこれは紛れもない真実であって、菅原の表情を見る限りでは、
それが理解してもらえたみたいだ。

けれど、彼女の表情には安堵ではなく、暗雲のようなものが立ち
込めていた。

「なるほどね。すぐくうらやましい」

「うらやましいだった？ そりゃあ成績が何もしてなくても良くな
るのは便利だよ。でもな。俺は普通でよかったんだ。生きてれば嫌
なこと、辛いことだってたくさんあるだろ。それを全部忘れ去って
しまいたいと何度思ったことか」

「それでもうらやましいわよ！ わたしは……全てを忘れてしまっ
のだから」

「なんだって？」

耳を疑った。

想像とは大きくかけ離れたものだった。

いや、厳密には想像なんてもの、出来っこなかったのだが、それ
でも、記憶を失ってしまう、なんてことが予測できるはずがない。

俺と真逆。

記憶を失えない俺と、記憶を失う菅原魔綾。

そんなことってあるのかよ……。

「全てっていうのは間違いね。正確には人に関する記憶を失ってしまふの。決まった日とかはないけど、だいたい1年に一度、その周期がやってくる」

菅原は向き直って、屋上の手すりに腕を置く。

金色に光る髪が、夕日に照らされて寂しげに見えた。

「忘れてしまふ……親や友達も関わった人みんなを忘れてしまふってののか？」

「そう。だから私は約1年おきに全てを失う。お母さんのことも父さんのことも 仲良くしてくれた友達のこともね。その度にどれだけ人を傷つけて、どれだけ傷ついたか。あんたには到底わからないでしょうね」

何も言えなかった。

1年おきに人の記憶が失われてしまふ。想像しただけでぞつとずる。

でも菅原は実際それを経験して生きてきたんだ。俺なんかとは比べものにならないくらい辛かったのだろう。

「今日正門の前で喧嘩してたのもそのせいよ。悪いのは全部わたしのに。記憶がなくなるなんてみんな知ってるはずもないのに。わたしには記憶がないからって仲良くしてくれてたはずの子を切り離したの」

「おい、ってことは記憶を失ったのって」

「今日の朝よ」

菅原は続けた。

「朝起きたら記憶を失っていた。家の構造も部屋のどこに何があるかもちゃんと覚えていたのに。朝ご飯を用意してくれていたお母さんの顔を見ても、誰なのか全然わからなかった……ほんと、今学期は最低なスタートだったわ」

「信じていいんだよな。いや、嘘なんてつく理由がないもんな。そ

れだけの、辛いものを」

嘘をつくにも、真実を話すにも、どちらにせよ酷な内容だ。

「実際わたしの身に起きている現象だもの。まあ普通の人間なら信じないでしょうね。でも記憶が突然なくなるなんてのは大して珍しいことでもないのよ」

「そうなのか？ 聞いたこともないが」

「これだから勉強だけの知識人は嫌いなものよ。事故とかの衝撃で記憶を失うっていうのはよくあることでしょ？」

「今はつきりと、嫌い。と言われた気がしたんだが……いやまあいい。たしかに、それはよくある記憶喪失だけど お前の場合は突然記憶が消えるんだろ？ それもだいたい1年周期で」

菅原はもう一度こちらに向き直る。真剣な話をしているのに、こいつは常にだるそうだ。

「生きていること自体に疲れているような……いや、今日あれだけの騒ぎを起こしたんだ。気疲れしていないほうがおかしい。」

「それに、わたしは事故なんかにあってないし、頭を派手にぶついたりもしてないの」

「つまり、なんの前ぶれもなしに記憶が消えたってことか？ もしそうだとしたら」

「ああああもうめんどくさくなってきた！」
ええええええ。

「なんだよ急に……めんどくさいって……」
突然頭をかきむしりだしたかと思えば、めんどくさいと意味不明な発言をかましやがった。

「いやもうほんとめんどくさいの！ なんて何も悪いことしてないのにこんな目に合わなきゃいけないの！ 返してよ……お願いだから」

返してよ。というのは記憶のことだろうか、それとも記憶を失ったことよって忘れてしまった人たちのことだろうか。

それとも、両方か。

どちらにしる、たしかに理不尽な話だ。

菅原魔綾はすっかり黙りこんでしまった。俺一人を残してどうしろってんだよ……。

何かを言うべきなのだろうか。

たぶん、言うべきなのだろう。

「おい、大丈夫か？」

その声をかけてやることしかできなかった。それはもちろん、柄にもなく善意から生まれたものなんだが。

「触んなハゲ！」

暴言が返ってきた。

「触ってねーよ！　そして俺はふさふさだ！」

「声が鼓膜に触れたのよ！」

「そこで触れるという動詞は使わねーよ！　そして俺はふさふさだ！」

「あーもう、ふさふさふさふさうるさいわね……。あんたハゲにコンプレックスでもあるの？」

「ねーよ！　あまりにも自分がハゲてなさ過ぎてつつこまずにはいられなかつたんだよ！」

うちの家系にハゲはいない。

髪が薄い親戚はいるが、あれはまだハゲとまでは言えないはずだ、きつと。

「じゃあそんなアフロの嘉神くんはあたしにセクハラしようとしたわけね？」

「ふさふさだったらアフロってお前……。んで、触ってねーつつってんだろ！　しようともしてない！」

「だから声が鼓膜に触れたって」

おいこれ、無限ループじゃないか。

「そろそろ話を本筋に戻すぞ」

咳払いをして、一旦流れをストップさせた。

「閑話休題、というわけね」

自慢げな顔で四字熟語を言われると腹が立つ、ということを学んだ。たぶん、他のやつが言っても大してむかつかないんだろうけど。こいつはたぶん、別格。

「だいぶ話が逸れていたが、お前は俺のことを知ってるんだっただな。記憶がなくなっただにも関わらず」

「そう、今朝人に関する記憶がなくなったのにあなたのことだけは知っていたの。あたしが正門で言い争ってるとき、ギャラリーの中にいたでしょあなた」

俺が菅原を見て驚いていたとき、菅原も俺を見て同じような感覚に苛まれていたわけか……まあ、菅原にとっては、知っているという事に驚き、俺は知らないということに驚いた、という点では全く逆な意味合いになってくるわけだが。

「そのとき、俺もお前を見て驚いてたんだ」

「それはわたしが美しすぎたから？」

「はあ……自意識過剰もほどにしとけ。お前のことを知らなかったからだよ。同じ学校の生徒なのに記憶の中にいなかったんだお前は」

たしかにそれもあるけど、とはもちろん言えない

「ということは、あなたの記憶力に矛盾が生じたってことね」

「言い得て妙だな。まさにその通り。お互い矛盾が生じてるわけだ」

「はあ、呆れた」

突然呆れられた。

「何に呆れたんだよ」

「あなた、これはきつと運命だぜ、とか思ったでしょ。生きなければいいのに」

「まず俺の心情に確認をとってから呆れる！ そんなこと毛ほども思ってたねーよ！」

「屁理屈のつっこみだけは冴えてるみたいね。屁理屈っこみだけは冴えてるみたいね」

言い直しやがった。

とてつもなくくだらないことを。

「そして、生きなければいいのにつてなんだよ！ 死ねっていうより立ち悪いわ！ 文章的に無駄に長いんだよ！」

「でも運命を信じられなくなってしまったら終わりだと思うの」

「それはこっちの台詞だ！ あ、いや……こっちの台詞でもないが……、少なくともお前が言う台詞じゃない！」

そうかしら、なんて冗談めかして言うあたり、ほんと可愛くねーなーと思う。

美人でも可愛いとは限らない、なんて名言も思いついてしまったじゃないか。

「んで、また話が逸れてるぞ。結局、お前はなんで俺を呼び出したりしたんだ？ 似たような現象に陥ってるってのは確認できたわけだけど、お前だってこの妙な記憶力現象に関しては何もわからないんだろ？」

うーん、とあの有名な像のように頭を抱える菅原。

こいつ、あんまり危機感とかないんじゃないかねーの、とか思ってしまった。

記憶がなくなってしまうってのは、俺のより随分不幸なはずなんだが。

「今のところ、わたしの秘密を知っているのはあんただけよ」

「だろうな。俺の秘密を知ってるのもお前だけだ。話して信じてもらえるようなもんでもないし」

「つまり、あんただけがわたしを救うことができる」

「救う？ 記憶喪失からか？ 原因もわからないのにそんなことできるわけ」

「問答無用！」

そんな気はしてた。

呆れ顔の俺を前にして、菅原は自信たっぷりの表情に急変した。

そして意味もなくひらひらと一回転したかと思うと、菅原の人差し指は俺を一直線に捕えていた。

外見とは裏腹、意外にも饒舌、そして毒舌であったこいつのことを今更こんなふう形容しても説得力はないかもしれないが、白い羽を伸ばし、華麗に舞う天使のようだった。そう見えてしまったのだ。

言葉が出てこなかった。

問答無用という命令は無用だったらしい。

こいつは、自分が一番綺麗に見える角度、状況、光の当たり方、全てを熟知しているように思えた。

しゃべっていないときのあの無愛想な表情は、それを際立たせるため、敢えてそうしてるのかもしれない。

もし本当にそうだったとしたら、呆れるを通り越し、素直に感服するんだが。

そんな菅原魔綾が放った一言は、あまりにもキャラに合っていないため、一瞬ゲームか小説の世界にいるような、そんな気分になされた。

「わたしの王子様になってみせなさい」

残り続けるもの

？

残り続けるもの

「はあ？ 王子様ってなんだよ。そんな迅速過ぎる対応は困難を極めるぞ」

「わたし、鈍感な男は嫌いって知ってた？」

「なんとくわかるけどさ……」

直接的ではないけど、誰にでも理解できる嫌み、というものを彼女は熟知しているらしい。

菅原魔綾は二重人格なのだろうか。途端にシリアスになったかと思いきや、再び暴言を浴びせるマシンガンへと変貌する。

「まあいいわ。1と言わずマイナス5くらいから説明してあげないとわからないみたいだから」

菅原は軽く咳払いをして続けた。

「わたしね。記憶を定期的に失ってしまうの」

ほんとにマイナス5くらいから説明しやがった。

「俺が悪かった！ 1からの説明をお願いしますー！」

「1からの説明でいいの？ さすがは学年トップ」

「その学年トップっていうのやめてもらっていいか……」

「王子様っていうのは」

ガラスのように明瞭な無視だった。いや、まあ無視されても特に実害のない内容だったが。

「あんたがわたしの為に尽くすっていうことよ。どう？ わかりやすい説明だと思うけど」

「逆説的な物言いになってしまっけど、わかりやす過ぎてわかりにくい。そもそも王子様ってのは気高い貴族だろ？ なんで誰かの為に尽くす必要があるんだよ」

また呆れたのなんだのと罵られて正論らしく聞こえる自論を散々聞かされるんだろうな。

「まあたしかにそうね」

意外な反応だった。頷くだけで意外だと言われる人間はおそらく今までこの世界に存在しなかっただろう。

「私的な試みが含まれていたことはちゃんと認めます。王子様ってほら、メルヘンでおしゃれな表現じゃない？ そういうものに惹かれる年頃なのよ」

「たしかに、セリフに入っているだけで少しメルヘンチックな風景を思い浮かべてしまう数少ない言葉だとは思うが」

おしゃれかどうかは別として。

「で、実際のところ、王子様じゃなくてなんなんだよ」

「救世主　もしくは、奴隷、といったところね」

「救世主のほうでお願いします！」

こいつにとっては、救世主と奴隷って似たような部類なのか。

「おっけーよ。じゃあ救世主ということで認定しておく」

いや、ちよっと待て。

話の流れが一方的になっている気がする。自我を保つんだ。

「待て待て！　俺はお前の救世主になるなんて一言も言っていないぞ」

「知ってる。でも、断れないはずよ。わたしたちはお互いに秘密を打ち明け合った仲なのだから」

「仮に救世主になったとして、いや、救世主もなんなのか意味不明だが、仮にそうなったとして、こっち側の利益はあるのかよ」

「わたしと一緒にいる時間が増える」

そうだ。この女は自意識過剰な面があるのだった。

今だって、これで反論はできないでしょう、と本気で思っている顔をしている。

菅原魔綾と一緒にいる時間が増えるとなると、もちろん他人に見られることも甘んじなければならぬ。菅原魔綾は今日の一件でかなり悪評が広まったはずだ。それを踏まえると、ことによっては俺に火の粉が降りかかってくる可能性だって大いに考えられる。登校初日からこんな普通じゃない状況におかれておいて、更に日常から遠ざかってしまうというわけだ。

とはいえ、これが俺の理性全てをかき集めた結論なのだとすれば、絶望にも近い、自分に対する怒りのようなものを覚えてしまう。

俺は、自分の利益しか考えていない

冗談めかして言っているけれど、菅原魔綾の言葉は本気なのだろうとおよその推測は立っているにも関わらずだ。

助けてほしいと、今日初めて会ったばかりの俺に懇願しているにも関わらず、それを拒否しようとしている。素直になれない性格なんだということくらい数分話ただけでも十分わかる。

道徳的にどうこうというより、何か自分が間違っている気がしたいや、きつと間違っているはいないんだけど、ヒーローや英雄になれるような主人公タイプの人間はきつと別の選択肢を選ぶんだろうな、という感じがどうにも腑に落ちないのである。

自分らしさってのに縛られるのも現代っ子ばくってやられてられない。そんなこと今まで思いもしなかったんだけど

今日は珍しく、直感にお世話になることが多いな。

「救世主〓助けるってことだよな。助けるってのはやっぱり、記憶を失ってしまうことに関してなんだろ？」

「簡単に言つと、そういうことね」

「じゃあひとつ条件を出してもいいか？」

「言うだけ言つてみていいわよ」

拒否が前提になつていそうな台詞だな……。

「俺からだけじゃなくて、お互いに助け合うことにしよう。そうすればこつち側からも、なんだか腑に落ちない、なんてこともなくなるし。それに、俺みたいな人間が素直に人助けなんてそもそもできそうにないだろ？ さすがに初対面とはいえ、それくらいはなんとなくわかるはずだ」

「でも、あんたは何も困つてないでしょ？ 記憶力を手に入れただけなんだから」

そう思うのも無理ないか……。人の悩みを理解するなんてのは、本当はものすごく難しいものなのだから。

それが簡単にわかれば、きつと心理カウンセラーなんて職業は存在していないだろう。表が普段の顔ならば、裏の顔はきつと悩みに充ち溢れているのだ。誰だつて暗い想いを表に出したくないに決まつてる。

不可解な現象が起きている俺たちなら尚更。

理解できないものが、もつと理解できにくいものになつてしまつている。

でもだからこそ菅原魔綾なら、逆とはいえ、同じく不可解な現象に陥っている菅原魔綾なら、俺の本当の悩みも理解することができるといふ逆説的な考えも成り立つのではないか。

「さつきも言つたと思うけど、全て覚えてしまうこととはつまり、忘れてしまうことができないということなんだ。わかるか？

時間が解決してくれる、つていうよく使われる台詞があるだろう？

俺の場合、その言葉が通用しないんだよ」

「なるほどね。忘れたくても忘れられない状況をなんとかしたいと

「そういうことだ。細かい例を挙げたらキリがないから今はやめと

くけど、お前ならなんとなくわかるだろ？」

「わからなくもないわね。記憶ってけっこういろんなところに影響を及ぼすから」

まあ菅原の現象に比べたら、すごく卑小な悩みなのかもしれないけど。

「それにしても、解決策がお互い見えてこないような内容よね」

「お前がそれを言ったら何も始まらないだろ」

「じゃあ何か良い案でもあるの？ さすが学年トップ」

「まだ何も言っていない！」

「じゃあ良い案が出るまで、3、2、1、0」

「……」

そんな簡単な振りで解決しちまっていいのかよ……。

真面目な話が、一定時間しか続かないこの状況。

そんな状況下で、校内に残っている生徒は速やかに帰宅せよ、という校内放送が流れた。登校2年目にして、初めて聞いた放送である。

普段、こんなに遅くまで学校に残ってることなんてないからな。

それにしても、今日は初めてだらけの日だった。というより、菅原魔綾が俺にとって、初めてだらけの女だった。

美少女、だけど性格は破綻している、俺の記憶に残っていない女、そして、初対面でこれほどまで会話を続けたのは本当に初の体験だ。初対面なんて苦手の極み、上手く話せるはずもない。でも菅原魔綾は見事なまでに対応力を持っていた。いや、こいつのペースに合わせさせたのは俺のほうなんだが。

「じゃあ明日！ 明日までに解決法を考えてくるっていうのでどう？」

「一晩で考えろってことかよ……たぶん無理 　　というが無謀だぜ
それ」

「無謀でもいいから！ やるだけやるのよ！ 殴るわよ？」

「言葉の暴力だけでは飽き足らずだと！」

女の暴力は多種多様よ、なんて続けてるあたり、この口論は終結を迎える気配がしない。

「てか、もう校内放送もあったし、帰るぞ。教師たちもさすがに屋上までは見回りに来ないだろうし、正門閉められたら困るからな」

「じゃあ先帰っていいわよ」

「お前はどーすんだよ。マジで閉まっちまうぞ」

菅原は憂鬱そうに空を見上げる。夕日に何かを懇願しているかのように。

「ちょっとだけここにいろわ。すぐ帰るから心配しなくていい」

そう言って、また明日、と小さくつぶやく。

耳を澄ませて、ようやく聞こえるくらいの小さな声だった。

また明日

明日も菅原と会う。

それはもう、ある種避けられないイベントになってしまっている。シュミレーションゲームでよくある、制作スタッフが力を入れて用意したイベントのように

そんなイベントはやっぱり、主人公にとって大きな影響を及ぼすことになるのだろうか。

螺旋階段を降りながら、そんなことを考えてしまった。

夕日が細く差し込んでくるこの階段は、そういうセンチなことを考えさせてしまう魔法の力を持っているらしい。

一応、C組の教室をのぞいてみたが、星野たちは先に帰ったらしい。

まあこの時間だし、教室の鍵はもちろん閉まっている。

明日星野と紗月になんて話せばいいんだろう。

悩み事を相談された、なんて言っても、なんで俺が、ってことになるのがオチだ。かといって真実を全て話すわけにはいかない。俺

の秘密がバレてしまう上に、菅原を裏切ることにもなるからな。裏切るってのは言いすぎかもしれないけど、他人を巻き込むのはどちら側からしても理にかなってないよな。

記憶が消える　　か。しかも単なる記憶喪失じゃない。

消え続ける

ちよつとした言葉に「続ける」を付け加えるだけで、それは大きく意味を変える。変えるというより、残酷さを増す、とでも言うべきか。

怪我をする、怪我をし続ける。後者のほうが何倍も残酷に聞こえる。まあ、怪我をし続けるなんてことは相当運の悪いやつじゃないとあり得ないことなんだが。

でも実際に菅原はそのような状況下にいる。

怪我みたいな身体的な害はないが、むしろそつちほうが軽傷なんじゃないかと思うくらい、精神的ダメージが大きい。相当運が悪いのだ。

運のせいかどうかなんてわからないけど、実は糸を引いている黒幕がいる、なんてとてもじゃないけど考えられない。

そして、記憶が残り続ける俺は、消え続ける菅原と、何をどのようにして解決していけばいいのか。

3年悩んで思い浮かばなかった解決策が、それも簡単に、それも一晩で思いつくとはとうてい思えない。仮に思いついたとしても、それはやっぱり一時的な対処になるのだろう。

やっぱり技術的なものに頼るしか……脳の専門家であったり、精神カウンセラーに。

もとい、そんなもので解決するなんてまずあり得ないんだが。

もちろん試したわけじゃない。試す価値すらない、という結論に至ったのだ。

2年も経てば、さすがに思いつく程度の解決方法はだいたい試行錯誤を繰り返してみたりしている。

「異常な記憶力」については嫌というほどネットで調べてみたし、書籍もいくつか読破してみた。卓越した記憶力を持っている人についてのはやはり世界に何人かいるらしい。

だけど、俺と彼らには決定的な違いがある。

彼らは、その記憶力を自在に使える。つまり、これは覚える必要がある、と思ったものだけを覚えることができるのだ。もちろん、人間本来の記憶力として自然に、風景を覚えていたり、人の名前を覚えたり、というのはあるが。

それでも一切合切、事物選ばず、ということはない。そんなあり得ない記憶力の情報なんてもちろん、ネットにも書籍にも記されているはずがないのだ。

そんなあり得ない状態から、一体いつ抜け出せられるのだろうか。菅原魔綾もそれと同じような感じで、「あり得ない状態」ということになるのだろう。

念のためネットで検索エンジンにかけてみたりは試してみるつもりだが、おそらく実例なんてものは存在しないだろうな。もしそんな境遇の人が他にいたとしても、ネットの掲示板なんかに軽々しく書き載せたりはしないだろう。

誰も信じてくれないし、信じる者がいたところで　と行き詰ってしまうのがオチだし。

とりあえず、まずは単純思考。

さすがにこれくらいは……と言えるレベルの対処法でも箇条書きにしておこうか。もしかしたら菅原がまだ思いついてないものがあるかもしれないし。

まさか徹夜なんてしないでいいよな。記憶に関しての問題はまあ、長期的思考で地道に解決策を練っていけばいいし、何より睡眠時間での人間が健全に生活していく上でかなり重要な習慣だ。

そして、8時間という充実した睡眠だったにも関わらず、目覚め

の悪い朝がやってきた。

起きて最初に思い出すのは菅原魔綾のこと。

単に、昨日あいつと出会った衝撃が大きかったただけだと思うが、なんだか腑に落ちない。全ての事象を記憶できる俺が、最初に思い出すのがあいつなんて。

というより、そんなことを考えてしまっている自分に驚いた。

昨日松本や星野に言われた通り、俺は他人に興味を示すことがほとんどない人間だ。目にした全てを記憶の中に閉じ込めてしまう。その能力のせいで人のことを考えるのが嫌になっていたのかもしれない。

今日の電車の中でも、ほとんどが顔を覚えている人間だった。誰が何をしながら電車に乗り、電車を降りるのか、そんなことをいちいち覚えていても全く意味がないのに。

それでも記憶の貯蔵庫は容量オーバーを知らせる鐘を鳴らすことはなかった。

それどころか、またひとつまたひとつと頭の中に収納されていく意味のない記憶。記憶というより、もはや寄生虫のようだ。もちろん、そんなこと菅原の前で言えるはずもない。贅沢な悩みだと言われるに決まってる。

電車を降りて駅の改札を抜けたとき、目の前に立っていたのはいつもの星野ではなく、菅原魔綾だった。そうか、星野は今日から朝練が始まるとか言ってたな。いや、問題はそこじゃない。なんて菅原が駅で俺を待っているのかってことだ。まさか昨日の話を続きを朝っぱらからするつもりじゃないだろうな。

にしてもなんで俺が電車通学なのを知ってるんだろう。

紗月と一緒に、俺をさがしているときにでも聞いたんだろうか。ていうか、人を待つなんてことができるやつだったんだな。

まあそんなことはどうでもいい。それより日をまたいだせいか、

まるで初対面の人を見ている気がしてしまっ。

しかし、風でたなびくクリーム色の髪と不機嫌そうでツンとした表情は菅原魔綾に間違いない。

早く話しかけると言っているような顔をしているので俺はしょうがなく声をかけてやる。

「よう、何してるんだ」

わざとらしく棒読みの口調で言ってみる。

「何って、決まってるじゃない。あんたが一晩かけて考えに考えぬいた解決策を聞くためにわざわざ待ってやってたのよ」

「あのなあ。一晩で考えてどうにかできる問題じゃないのはお前もわかってるだろ」

「まさかあんた、何も解決できそうにないのにこのことやって来たわけ？」

「待ってたのはお前のほうだけだな」

菅原は何も言わなかった。もしかして、少しでも言い負けそうになったら黙る、なんて小学生が考えそうな反抗でもしてるんじゃないだろうな。

でも、とりあえず無言なら、俺からまた何か言わなくちゃいけないってことだよ……。

「まあアドバイス程度ならしてやれるかもしれないぞ」

「最初から解決策なんて期待してないわよ」

「さっきの発言とだいぶ矛盾してるぞ！」

そこで一旦会話は中止。

通勤、通学する人混みに、押されるように駅を出た。

ちらちらと知り合いの姿も見えた。彼ら側からすれば俺が美女と一緒に登校しているように見えてしまうことだろう。見えてしまうというか、まあ実際に一緒に登校しているということに間違いはないのだが。それには不純の欠片もない確固たる必然性を持った理由が存在することなんか傍から見てもわかるはずがない。

「で、アドバイスって何？」

前を向いて足を運びながら、単調な声音で菅原は言った。

「もうすでにやってることだったら悪いが、一応言っとくか……お前、日記とかつけてるか？ その日に起こった出来事とか、人とどんな会話をしたかだとか」

「も、もちろん！」

つけてなかったらしい。

ももちろんでなんだよ。桃恥論なんて変換してみれば卑猥な用語にでもなりそうだな。 そんな言葉は絶対に存在しないけど。

いや、そんなことより。

「日記つてほら、嘘偽りなく書くんじゃないかって、多少美化して書くこともできるし、嫌なことは無理に書く必要もないだろ？ だからお前の場合、忘れることを前提にして書けばかなり楽しい日記が書けると思うぜ。まあ完全な真実が書きたいってのもあるかもしれないけど」

「あんだ相当ひねくれてる」

「そうでもないだろ。まあたしかに、自分の記憶が消えることを逆利用してるみたいになってるけど、まあそれくらいのハンデは許されるんじゃないのか？」

「甘い！ 甘すぎるわ！」

聞いたことあるようでないような台詞だな。

「それと、さつきからまるでわたしが日記をつけてない、みたいな言い方してるけど」

「ああ、悪い。日記つけてるんだっ たな」

と、少し呆れた口調で言ってみる。

こいつ、実はちょっとバカなのかもしれない。記憶が消えるってわかってるなら日記くらいいつけるよな普通。ほんとに全く対策してなかったのかよ。

「でも日記つて面倒じゃない？ それに、その日あった出来事を全部書くのって物理的に不可能でしょ。心の内面とかまで詳細に書くことなんてできないし」

「でもせめて交友関係がどういう状態だとか、そういうことだけでも書いておいたほうがいいだろ。ほら、昨日のひと悶着みたいなのもう経験したくないだろ？」

昨日のこと、それを思い出したのか菅原は少しうつむく。
よほどシヨックだったのだろう。

まあそれもそうか。あれだけ責められれば誰だってそうなる。しかも、全く知らない相手に、正確に言えば忘れてる相手だけど、そんな人たちにいきなり罵倒されるなんてこと、想像するにも恐ろしい。

「まあ一応書いてみる……日記」

菅原はあからさまに声のトーンを落として言う。

ていうか、日記書いてなかったことを公言した形になったがそれはもういいのかよ。

と言いたかったが、途端にテンションが低くなった菅原の前に、それは言わないでおいたほうがいいという結論に至った。

C組の教室に入ると、何やらざわついている様子が雰囲気伝わってきた。

俺はすぐに勘付いた。みんなの目線の先を見れば一目瞭然だ。

明らかに注目を浴びているのは菅原魔綾。

俺と同時に教室に入ったせいかな、俺まで不審の目線を浴びてしまっている。

やっぱりな。

こいつと一緒に行動するってことは、俺だって注目的になっちゃうのは当然。

一年かけて取得した優等生というレッテルが早くも境地に立たされている。

もちろん、菅原がこれほど注目を浴びているのはやはり昨日の騒動のせいなのだろう。

高校生、特に女子の情報伝達スピードは尋常じゃない。関心してしまうほどだ。

それに加えて、噂は人を伝う毎にその正確さを失っていく。あるいは、人が興味を抱きそうな部分だけ肥大化されていく。

噂というものは決まってそういうものだ。

菅原が悪いってことにはもちろんなってるだろうし、良いほうに噂が形を変えるってのは考えにくい。

その当人、菅原はというと、

まあそうなるよな

明らかに不機嫌そうな面、顔には出さないよう気を使っただけなのかもしれないが、その試みは明らかに成果を導くことはできなかつた様子だ。

もとより無愛想な表情であるが故、一般人で例えるなら、本気でキレてる時のような状態にまで到達してしまっている。

目は獲物を見据えたように濁り、口元では唇を噛み締めている。

それでも、相当我慢しているはずだ。

そんな菅原を見るや、C組の生徒たちは素早く顔を伏せる。

あたかも、菅原のことなんて一切話してなかったかのように、昨日の夕飯の話や部活の話などをわざとらしく喋り始めた。

やっぱり、陰口ってのは陰で言うべきだよな……。本人には絶対聞かれないような場所だ。

でも、学生としては教室でクラスメイトのことを聞こえないように喋るってのは避けられないのかもしれない。

羽賀の件だって、俺と星野は教室で喋ってたしな。

それに、菅原の件は別に陰口が聞こえたわけじゃない。

雰囲気なのだ。

それだけで十分すぎるほど把握してしまう。それほど話題性に富んだ事件だったのだろう。

「すでにクラス全体に広がっているらしいな」

俺は小声で言った。

巻き込まれないために他人のふりをするってのが妙策だったのかもしれないが、俺がここで菅原を律しないと何かが暴発してしまう気がしたのだ。

何か、というのはもちろん菅原本人の怒りである。

「昨日言い争った野口ってやつのは作業ね。でも自分で選んだことなんだから、気にしてたらキリがないわ」

「じゃあ今にもキレそうなの顔はなんだよ……」

正確に言うとキレそう、ではなくキレている、だ。

「これは敵を撃墜するための顔技よ！」

「お前は顔の表情だけで敵を撃墜できるのか！」

いや、たしかにできそうではあるが。

で、その顔って技だったのか……。

「あんだだっっていうも不機嫌そうな顔してるじゃない。あれは、俺と接触しようだなんて難攻不落の一言に尽きるぜ、って顔で表現してるんじゃないの？」

「そんなダサい台詞を顔で表現なんてできるか！」

お前とは違って、俺は恵まれない顔の持ち主なんだよ。本当に機嫌が悪くて機嫌悪そうな顔するって、今自分がどんなに贅沢なことをしているのか理解してもらいたいものだ。

「で、そんなことより、あんたはいいの？」

「何がだ？」

「あんだまで注目浴びちゃってるみたいだけど、さっさと席についてほうがいいんじゃない？」

そう言い残して、菅原はさっさと自分の席に行ってしまった。

相変わらず、テンションの変化自在なやつだよな。

にしても、教室に入るや否や口論を繰り広げる俺たちって、かなり変な目で見られてただろうな……。

これで、俺と菅原は知り合いだっということがバレちゃったし、ここまですれば野となれ山となれだけど。

それと、菅原の最後の言葉

これってやっぱ気を使ってるってことなのか。

昨日は、記憶が消えて間もないってことで焦っていただけなのか
もしれない。俺に助けを求めたのも、もしかしたら衝動的なこと

で。本当は、巻き込んで申し訳ない、とでも思っているのかもしれない。
い。

まああいつに限ってそんなことはないか……。

あいつに限って

俺は菅原の何を知っているというのだろう。

昨日会ったばかりの菅原の、何を理解できたというのだろうか。

きっと、まだ何も確定事項なんてない。

自分がこうして、菅原とどうする、なんてこともまだ整理できて
いないのに、何を気取った思い違いをしていたのだろう。

厚顔無恥というか、自意識過剰というか、俺ってそういうところ
あるよな……。

こういうことを考えるのもまた、自己陶醉しているだけなのかも
しれないけど。

「さあて、昨日の話を詳しく聞かせてもらおうかね！」

朝っぱらから眩しくて目を逸らしたくなるほどの笑顔で登場した
のは、もちろん星野である。

さて、どう誤魔化したもんか……。

「昨日、一体菅原さんと何があったんだ？ 今日も一緒に登校して
たみたいだし。一日で友達になるなんて瑛司にしてはやるじゃん」

「それがどうも、あいつ相当頭悪いらしいんだ。学年最下位になっ
たこともあるらしい。それで学年1位の俺に相談しに来たってわけ。
まさか、本当に勉強関連のことだとは思わなかったよな」

咄嗟に出た誤魔化しにしては、上々の出来上がりである

とは、どんなにポジティブに考えても、思えなかった。

「へえ……それで友達になつたと……」

「友達つてほどでもないけど、ほら、今日も英語の小テストがあるだろ？ 単語ひとつ覚えるのに2時間もかかるっていうから、効率の良い暗記法を教えてやろうつてことで朝集合したんだ。やっぱ相当頭の悪いせいか、電車に乗るのも一苦労だったみたいだぜ」

躍起になっている俺がいた。

口調の具合は無論、真面目の一面倒なんだが、言ってることが常人のそれではない。

いや、相手は星野だ。あの単純野郎なら大丈夫だ。

疑わしげに目を細めてるあたりが気になるが。

それと、教室の右端あたりから殺気を感じたりもするけど、気のせいだろう。気のせいだと思いたい。

そして、気のせいじゃなかったことがわかってからも、俺はしばらく現実を逃避し続けた。

その結果がこれだ。

「あんた、なにあることないこと言ってるのよ！ 英単語覚えるのに2時間かかる？ 2時間あれば100個は覚えられるわよ！ それに、頭悪過ぎて電車に乗るのも一苦労つて、それ頭悪いつていうか一般常識のない変人じゃん！」

菅原魔綾のプロフィールに、つつこみスキルは皆無、が付け加えられた。

そして言うまでもなく、教室中の視線は菅原に注がれた。今自分が置かれてる状況を忘れてしまったんだろうか。

教室は完全な真空状態のように、静まりかえっている。学校中で噂になっている当人が、いきなり大声で低スキルのつつこみを入れたりすればそれは避けられるはずがない。

ガラガラつと勢いよく教室のドアが開く。

「どーもどーも！ C組の皆さんおはようございます！」

このタイミングで厄介者の登場である。

いつも通り、陽気な声で教室に入ってきた（入ってきてしまった）のは紗月だ。

もちろん、C組の全員が見て見ぬふりをした。

紗月が誇る、空気の読めないつぷりは異常なわけだが、今日に關して言えば、今までのそれを遥かに凌駕している。

「あれ、なんか間違えちゃった？」

お前はいろいろと間違えてるよ。

それにしても、C組の連中がここまでだんまりを決め込んでいるのもある意味すごいよな。紗月の知り合いじゃないにしたって、なんらかの反応くらい示してもおかしくないのに。

C組に大人しいやつが多いっていう情報は、確かに間違いなさそうだ。

「もっかい入り直すね……」

「入り直さなくていい！」

そんな愚行は許せなかった。左端最後尾の星野の席にいた俺のつこみは、教室中に響き渡った。

そして、教室は静かなままだった。

ここは何をしてもすべってしまう異空間かよ！

「そっかそっか、じゃあとりあえずそっち行きますー」

と言つて、紗月は俺と星野のいるところまでやってきた。

「これなんなの？ あたし間違えて職員室にでも入っちゃったのかと思っただよ」

「菅原がやつちまった、とだけ言っておこう」

「瑛司と？」

「と、ってなんだよ！ 言葉を勝手に肥大化させるな！」

紗月は、下ネタも許容できる、ていうか自ら発する数少ない女子である。星野は、そこは評価できる、と言っていたが、健全な女子を表面だけでも保ってほしいというのが俺の意見だ。

「だってー。昨日あんなことやこんなことがあったんじゃないの？」

それ聞きにわざわざ遠いところからC組まで来てあげたんだよ」
毎日来てるじゃねーかよ。それに、A組からC組までは1分で到着できる。

「期待させて悪いけど、そんなことは一切なかった。まあ知り合い程度にはなっただけだな」

「なーんだ、つまんないの。とうとう瑛司にも彼女ができたかと思っ
ってお祝いをどうするかとか考えてたのに　瑛司のことだから、
肝心な場面でなんか失敗でもしちゃったんでしょ」

んなこと考えてたのかよ、こいつ。
とてつもなく、余計なお世話だ。

「肝心な場面なんかなかったよ。悪かった色恋沙汰が全くない男で、
そういえば、紗月の恋愛事情は全く把握できてないな。」

噂でも聞いたことはないし、自分から言い出すことももちろんない。
実は、こそこそと裏で遊んでるのかもしれない。

まあそこらへんは俺には関係ないことだし、教えられないような
内容じゃない限り、本人から話してくるだろう。

「なんか教えられないようなことがあったみたいだし、ほっとけば
そのうち明るみにでるんじゃないかなあ」

ボソツとつぶやいた星野の発言は、たしかに的を得ていた。

これから菅原と一緒にいる時間が多くなる可能性は高い。それを
踏まえると、妙な勘違いをする連中もでてくるだろう。高校生なん
かは特に、浮いた話が大好物だからな。

まあ、さすがに記憶に関するなんちゃらつてのが出回ることとはな
いと思うけど、後ろめたさのない真実を嘘で覆うっていうなんとも
煮え切らない感じがややこしい。

まあ、信じてもらえるような話でもないし、お互い秘密ってこと
になってるから仕方がないか。

その肝心な菅原はというと　顔を机に突っ伏している。

強情なのか弱気なのか、さっきの低スキルつつこみは顔も表に出
せないほど恥辱的だったらしい。

「おい、菅原さん。なんで寝てるの、朝だよー」

「おいバカっつっ!」

ちよつと目を離れた隙に紗月は菅原の前に素早く移動していた。これは大惨事になり得る。

いやまあ、菅原と紗月は昨日一緒に俺を探してたわけだし、別に気まずいってこともないはずだが、今の状態の菅原に紗月という名の油を注せば大破することは間違いない。

「ん…誰あんた あ」

顔を上げ、紗月を確認した途端、彼女は逃げた。

とてつもなく、なめらかな動きで。

そういう意味では、一応油としての役割を紗月は果たしたらしいけど、なんで紗月から逃げる必要があったのかは全くもって意味不明だ。

「あれ、菅原さんどうしたのかな？ あたし何か悪いことしたっけ

ー？ あーもう今日のC組なんか変だよ!」

「今は誰とも話したくないんじゃないのか？ ほつといたほうがいいと思うぞ」

誰とも話したくない、というのは差し詰め間違っていないはずだ。さっきの微妙な赤つ恥事件は置いといて、それ以前に菅原にとつて悪い噂が流れているのだ。昨日の騒動、それがどれほど菅原の内心に重くのしかかっているのかは、本人が隠しているとしか思えないほどの重量があるはずだ。

よくよく考えてみれば、紗月と星野はまだその噂を聞いてないのだろうか。

情報通で友達も多いこの二人からしてみれば、いずれは学校中に広まりそうな噂が、耳に届かないはずがない。

「ちよつと静かにしてくれないかな？ 勉強している人だっているんだし、もうすぐ朝のホームルームだろ」

一瞬、C組全域に緊張が走る。

特に、俺と星野のそれは他の人に比べてかなり大きな衝撃だった

はずだ。

俺たちに注意を促してきた人物、それは羽賀裕一だったのだ。

羽賀といえば、星野に聞いた話の影響で俺の中では危険人物ナンバーワンの称号を手にして間もない。

「ああ、すまないすまない。これから気をつけるよう俺からも言うておく」

星野の咄嗟のフォローが入り、羽賀も前を向いて体制を元の状態に戻した。不覚にも、冷や汗たらたら俺は小心者極まりない。

うるさかった連中を注意したってだけなら、本当にただそれだけなら、わりと日常茶飯事に起こり得る出来事なんだけど、羽賀の過去を知ってしまった俺からすれば、そして学年トップの俺からしてみれば、それは事件とすら呼べる衝撃シーンに成り上がってしまったのだ。

別にシャーペンを突き立てられたわけでもないんだがな、心臓には何か突き刺さったような感覚にはなったが、これもまた、実害があつたわけでもない。

でも一言だけ言わせてほしい。

朝のホームルーム前から勉強してるのはお前だけだ！

「じゃあわたしそろそろ帰るね。なんかすごく居づらいし……じゃあまたね！」

「お、おう」

唐突にやってきて、自分の教室へと唐突に帰っていく紗月。

まあ逃げたくもなるよな、いきなり無音空間のC組にやってきて、ちよつと騒いだけでガリ勉野郎に注意されたわけだし。

で、結局菅原のやつはどこまで逃げたんだろうか。

逃げる必要性も全くもって理解できなかったが、微妙な関係の間を前にして、逃げたくなる気持ちはわからないこともなく、俺はどうにも複雑な心境であつた。

結局、朝のホームルームどころか、昼休みを迎えた今でも菅原綾は教室に戻ってきていない。

まったく、行動のひとつひとつが意味不明だ。

「あれ、菅原さんどこか別のところで食事中？」

星野と二人で弁当を広げていると、毎度の如く紗月がやってきた。「いや、まだ帰ってきてないみたいなんだ。早退してるわけでもないらしいし、もう俺には手に負えそうにない。ほっときゃ、何食わぬ顔でそのうち帰ってくると思うけどな」

「あたし何か悪いことしちゃったかな。もしそうなら聞き出して謝らなくちゃ！」

「別に紗月は何もしてないだろ。あいつが勝手に逃げ出しただけだ」
紗月に非がないのは一目瞭然だ。だというのに、紗月の表情はいつもと打って変わり、暗いままである。それほどまでに気に病む理由が俺にはわからない。

「紗月ちゃん、何かあった？」

星野も、紗月の顔色から何かを窺ったみたいだ。こいつ、意外と気の使えるやつだからな。

「あたしに何かあったとかじゃないんだけど、聞いちゃってさ……菅原さんの噂……」

とうとうその噂は、A組にまで届いてしまったらしい。

それもそうだろう、あれだけのギャラリーの中にA組の生徒が一人もいないってのは考えにくい。

それに、噂を流した張本人であろう野口裕子はC組の生徒ではないのだから、C組だけに広まってるなんてことはまずあり得ないだろう。

「星野もどうせ知ってたんだろ、その噂のこと」

「ああ、黙ってて悪かった。朝みんなが話してたから自然に耳に入ってきたよ」

「で、紗月。その噂の内容聞かせてみてくれ」

菅原を助けると誓った時点で、俺は知っておかなくちゃいけない。

何事も知ることから始まる。

「うん、わかった。あくまで聞いた話だから正しいかどうかは自分で判断してね」

そう言っつて、紗月は続けた。

情報通の紗月が、これほど訝しげに、不安を押し殺したように、情報提供をしているのを見るのはこれが初めてかもしれぬ。

「菅原さん、仲良かった女の子がD組にいたんだって。名前はたしか……長谷川さん、だったかな。それで、昨日その子がいつも通り菅原さんに声をかけたんだけど、菅原さんは無視しちゃったらしいんだ。それで、あまりにもしつこいからついている言っちゃついたらしいよ。何を言ったのかは本人たちじゃないとわからないらしくて……それで、昨日D組の人が菅原さんとそのことで喧嘩して、菅原さんは謝りもしないで帰っちゃったとか。でも、昨日菅原さん放課後までいたよね。だからこの噂がどこまで本当なのかかわからなくて、それでいろいろ悩んでたの」

「なるほどな。お前のことだから、菅原がお前から逃げたのは放課後いたことを知ってるからだとか、それで自分にも幾分か責任があるとか思っただら？ もしそうなら、それは間違いなく考えすぎだぞ。あくまで、これは菅原自身の問題なんだからな」

紗月は、陽気な表とは裏腹、多少自己犠牲精神を持つてるやつで、すぐに人の心配ばかりしてしまう癖があるのだ。本人はそれを隠そうとしているみたいだが、中学から一緒にいれば、そのくらいのことはわかってくるものだ。

「そんな優しい人間じゃないよ、あたしは……」

そう言っつて黙りこくっつてしまう紗月には、何か別の悩みを抱えているようにも見えたが、それが具体的に何なのかといふところまで見透かせるほど俺の洞察力は優れていなかった。

言わなければ解決しないこともあるのだと、そんな言葉をかけてやるには、俺の人間性としての力量が足りていない。「でもそれつて、やっぱ菅原さんに問題があるというか、たぶん事情があるっば

いよな。無視してしまった理由だとか。理由もなしに友達を拒絶したりはしないっしょ？」

妙な空気に修復しようとしてくれたのか、星野がそこで割って入る。

「瑛司は何か聞いてないの？ 昨日ずっと菅原さんと一緒にいたわけでしょ？」

「ずっとつてわけでもないけどな、下校時刻には別れてたし」

もちろん、菅原は記憶を失っていてそれで昨日のような行動に出してしまった、なんて言えるはずもなく、場の流れに従って返答するしかない、なんともやりきれない感じだ。

それにしても、D組の長谷川つて人は菅原に何を言われたか公言してないんだろっか。

噂を流して徹底的に菅原を追いつめるためには嘘情報でもなんでも、暴言の数々を言い並べてもいいはずなのに。まあ友達だったわけだし、いきなりそんな天地がひっくりかえったように嫌いになるなんて不可能なのかもしれない。喧嘩することを避けて、本当の自分を友人に見せることもなく、世間で皮肉に使われる「上手い生き方」を貫いてきた俺には到底わかるはずもない話だ。

それはともかく、この状況をどう打破するかが今の課題か……。

記憶がないって言ったって誰も信じてくれないだろう、それは昨日の騒動で証明されてる。それに、例えば記憶喪失が信じてもらえたとしても、それが友達を切り離す理由にはならない。自暴自棄になつてしまふなんて、それは実際に記憶がなくなつてしまわないとわからないのことだ。

人の気持ちになつて考えるだなんて、生まれつき人間にはそんな能力、備わつてなどいない。

だけどそれは言い訳にはならない。

自分に非があつたことは理解してるみたいだし、菅原自身がその長谷川つて人に謝るしかないな。

菅原は被害者でもあり、加害者でもあるのだから

「あつ」

星野の視線を辿ると、今にも消え入りそうな顔つきで菅原魔綾が戻ってきた。いつもの無愛想面に加え、何もかもを放棄したがつているような、そんな負の感情が思いつきり顔に表れている。

「ちよつと行つてくる」

俺は二人にそう言い残して、菅原だるそうに座っている席に向かった。

「現実逃避してる場合じゃないぞ。昨日のことが噂になつてることくらい、もう耳に届いてるよな？」

「耳には届いてないわ。ただ、みんながわたしを見る目で十分わかる」

相変わらず屁理屈好きなやつだ。そこまで元気があるなら、この状況をなんとかしようつて考えに思い至つてもいいはずなのに。

「じゃあ何をすべきかわかつてるよな？」

「は？ 学校やめるとか？ それは無理、一応両親がお金払つて通わせてくれるわけだし、それは自分の中だけで解決する問題じゃないわ」

つて、それボケてんのか真面目に言つてるのかよくわからない台詞だな。

ちなみに、ここはひと悶着起こしちゃっただけで、責任をもって退学しなきゃならないほど校則のきつい学校ではない。

むしろ、うちの校則は非常にゆるい。

「バカだるお前。このままハブラれたままでもいいのかつて言つてんだよ。このまま噂が流れていつていずれば学年全体に広がるはずだ。お前はそれでいいのか？」

「じゃあどうしろつて言うの。実際、ハブラれる理由になるだけのことをわたしはしてしまつたのよ。友達を……友達でいてくれたはずの子に、ひどいことをしたんだから……」

「簡単だろ、謝りに行けばいんだよ。その友達でいてくれた子に謝りに行くんだよ」

これしかないよな、実際。

「無理、わたしには無理よ」

「はあ？　なんで無理なんだよ。自分が悪いってわかってるなら謝るのが普通だろ、ってかお前にはそれ以外、道は残されてないと思うぞ」

「勝手に決めないでよ。昨日会ったばかりのあんたに、わかったよ
うなこと言われたくない」

勝手に決めないでって……決めてるんじゃない、決まってるんだ
よ。

悪いやつが謝る、これは全世界共通の流れのはずだろ。

それとも、記憶がない自分に過去の友達は今更必要ないってのか
よ。

「お前、ほんとに一人になっちまうぞ　それでもいいなら、俺は
もうお前を助けようとは思わない」

思えるはずがない。

だってそうだろ、今の状況に甘んじようとしてるやつを助けるだ
なんて、そんな善人に俺がなれるはずもない。ましてや、他人の幸
せなんてこれっぽっちも願えないような人間の俺に、真正正銘の善
意なんて微塵も持っていない俺に　そんなことをするのは望むべ
くもないことだ。

「そっか　一人になるんだね、あんたもわたしから離れて……」

俺はそんな菅原の言葉を無視し、歩きだしていた。昼休みはもう
すぐ終わる、それでもどこか教室から離れた場所に行きたかった。

菅原との論争から逃げたわけではない。

話し合う必要性がないと結論づけたのだ。

必要性ってのは必ずしもそこになくってはならないものではないこ
とくらい、わかってる。それでも、菅原の為に何かしてやろうなん
て思えなかった。

何をすればいいかわからない内容なら尚更だ。

気がつく、俺は屋上に来ていた。まあ、ここにたどり着くべく階段を上っていたわけで、無意識だったなんてかつこつたことは言えない。人気がなくて、落ち着ける場所なんてここくらいしかないし、未成年じゃなけりゃ、ここは絶交の喫煙スポットになっていただろう。そうなれば、うちの高校で初の不良になる千載一遇のチャンスだったかもしれない。

チャンスというよりは、むしろピンチな気もするが。

でも学校の偏差値から言えば、授業をさぼって屋上に来ている時点で十分不良だよな。

えーっと、次の授業は……たしか、体育だったな。体操着に着替えるのに5分はかかるし、もうさぼる以外に選択肢はなさそうだ。

あ、そういえば、屋上からグラウンドって見えるよな

誰もいるはずがないのだが一応屋上全体を見渡しておいて、俺は屋上から顔だけ乗り出すように校庭を覗いた。

やっぱり、見える

グラウンドには、C組とD組の合同体育の授業の様子が驚くほど明確に、視界へと飛び込んできた。

授業開始のチャイムと同時に、教師が生徒をまとめている。声こそ聞こえないが、見慣れた光景は上から見下ろしてもだいたいわかるものである。

授業内容は、今学期はテニスで始まるらしい。そして、一人一人にラケットが配られる。

二人一組でペアを組めと、教師からの指示

菅原は一人だった。

俺の助言した通り、菅原は一人取り残されてしまったのだ。なんだよこれ、もういじめの域に入ってるだろ……。

もちろん、欠席者がいて人数が奇数になってしまったとか、そういうことも考えられるが、それにしただってなんで自動的に菅原が余ることになるのか……となるとやはり、あの噂の所為だと思え

ない。

たったひとつ、自分に不幸が訪れ、それによって感情がコントロールできなくなって、自暴自棄になって、それで新たな不幸が訪れてしまう。

そんな悪循環は不公平すぎる。

神は人を平等に創造した、なんて言う有神論者が身近にいれば全員殴ってまわりたい気分だ。すぐ暴力に走る人間にだけはなりたくないのだが、ついそんなことを思ってしまう。

グラウンドでは、菅原は教師に何かを言って校舎内へと戻って行った。おそらく、体調が優れないだとか言って抜けだしたんだろう。正しい判断だと思う。俺だって同じ状況ならそうしていたはずだ。一人になった人間は、逃げることしかできない。ゲームや漫画の主人公でもない限り、一人だけの抵抗なんてものに挑戦しようだとか言う人間が、現実に存在するはずがないのだ。

そして俺は、どうすればいい。

菅原魔綾の秘密を唯一知ってる人間として、何かすべきではないのだろうか。

だけど、菅原本人は今のままで言いと、俺の前で断言している。謝りたくない、そう言った。

いや、それは間違っているな　謝りたくないとは言っていない。無理と言っていたのだ。

それは、不可能という言葉に置き換えてもいいのだろうか。言葉の真意は、『謝りたいけど謝れない』そう言っているのかもしれない。

気持ちはわからなくもないけど、喧嘩した友達に謝るなんて小学生でさえ簡単にしてのけてしまう簡単作業だぞ。いくら菅原がプライド高き人間だからって、そんな単純に解釈していいものだろうか。簡単なことだ、友情を取り戻すことくらい

そんな風な言葉が続くのが定型なんだろうけど、なそんなことは

口が裂けても言えない。

そう考えを改めざるを得なかった。

菅原は記憶を失っている。加えて、これからも

記憶を失い続けていく。

そんな途方もなく未知な不幸を与えられた菅原に、友情を取り戻すことなんて簡単だ、と言えるやつがいるのならば、それこそ全員ぶん殴ってまわりたい。

例えば、さつきまでの俺とか。

軽く舌うちでもしてみる。

肝心なことを、一番重要なことを除外して考えていた自分を今更になつて悔やんでしまう。自分の考えを他人に、同じ気持ちになんてなれない他人に押し付けてはいけないなんて、それこそ全世界共通の流れ、ルールにするべきだ。

ルールなんて人類が誕生して何世紀も経過した今だって、よりよいほうに改善され続けていくものなんだし、特に目に見えないもののルールなんて、正解にたどり着くのは極めて困難だ。

やっぱり、俺は菅原を理解なんてできていなかったのだ。

直感つてすごいよな……、直感だけで生きていけば間違いが無いんじゃないかと思えるほどに。

それで、俺はこれから何をすべきなのだろう。

何かをすべきなのはわかるんだが、具体案が思いつかない。というより、ぼんやりとし過ぎている。

記憶喪失の人間が友情を回復するために手を貸す。なんて状況、俺自身の経験はもちろん、前例だつて見つからないだろう。

こういうときに、相談できる相手がいるって重要だよな。

星野だつていつもは呑気に笑ってるだけのやつだが、真面目なときは至つて真面目だ。何度あいつの力を借りてきたか、今では数えるに及ばない。

紗月はと聞かれると言葉に詰まってしまいが、あいつはあいつで、とにかく根っから優しい人間だ。

優しいっていう表現を選ぶと、どこかとってつけたような褒め言葉に聞こえてしまいそうだが、それを踏まえた上でそう言いきってしまえる。

なんて、柄にもなく友人を褒めてみたりするが、友人を頼ってみたところで、行動するのは自分自身だということは念頭に置いておかなくちやな。

それと、菅原の秘密を話さずにどうやって星野たちに相談するか、まずはそこで俺の力量が試される。

さつさと仕事を終わらせたい担任の松本、さつさと帰宅するか部活に勤みたい生徒は無言の意気投合、暗黙の了解を形成しているたぶん、C組だけやけに早くホームルームが終わるのはその所為なんだろう。

松本のあとを追っていけば、あいつがどこで隠れて喫煙しているのか突き止められそうだが、そんな取るに足らない興味に時間を費やしている暇など今の俺にはない。

こう言えば格好がつくだろうか。

仲間の力を借りに出発せねば。

うーん、援軍が待ちきれなくなつて逃亡の理由を探している使えない兵士っぱくで駄目だな。

そんな内心の独り言はほどほどにして、俺は部活モードに入ろうとしている星野の元に素早く移動した。

「おい星野ー。相談したいことがあるんだけど、部活ちょっと遅れていっても大丈夫そうか？」

「菅原さんのことか？」

「さすがだな。話が早くて助かる」

「今のタイミングで相談って言えばそれしかないだろ？ それに、自分の為じゃない相談って感じがするしな」

なんだそれ。

そんな感じがあんのかよ。

でもまあ、ほんと察しがいいよな。毎度そういう読みの鋭いクールキャラを演じればいいのに。

まあ多少俺とかぶってしまっ可能性もあるが。

いや、クールキャラってというか、俺は友達が少ないキャラか……。泣きたくなるぜ。

「やっぱ、瑛司は菅原さんの味方で、それでなんとかしてやりたいって思ってる感じなんでしょ？」

「まあそんなところだな。味方っていうのは大袈裟というかなんと
いうか、良い感じの類語が見つからないけど、あいつをこのままに
しておくのはどうにもいたたまれなくてな」

なんとかしてやりたいっていうか、見てられないっていうほうが正しい。

「瑛司はほんと成長したよな。これもたぶん菅原さんのおかげなん
だろうけど、自分以外の人に対してこんなに親身になってる瑛司は
見たことないし、そういうのに興味持たなかったもんな今まで」

「そういうのってなんだよ……」

まあ他人に興味がないっていうのは事実だが、それが改善される兆しがどこに見えているというのだろうか。

あと、菅原のおかげってのもおかしい話だ。

まあ初対面であれだけ言葉の攻防戦を繰り広げられたのは自分でも珍しいというか大したコミュニケーションだったとは思うが、あれは俺が成長したというより、相手が横暴過ぎた、というのが実際のところだろう。

それでも、星野の言葉は重みがあるというか、いつもが軽々しすぎるせいで真面目になると手の平を返したように説得力があるよな。「でも自分にできることなんて限られてくるだろ？ 特に俺なんて

言うまでもなく交友関係せまいわけだし、人の考えをひっくり返すようなことができればとは思えん」

ぼんやりと見えている答えを導くことが不可能だと、明確に見えてしまっている。こういうとき、人間関係の充実が大事だって思い知ってしまったんだよな。

できれば、認めたくないのだが。

やっぱり、星野や紗月のように生きれたらどれほど楽だろうと考えてしまう。

楽っていうのは短絡的な考え方ももしれない。人を物に例えるのは避けたいところだけど、でもやっぱり、便利なものであるということを知ってしまう。

友情やら愛情って、精神的にも身体的にも重要なものなんだろうな。

こういう場面に陥って、柄にもなくそんなことを考えてしまった。「それでもやるしかないんだろ？ 菅原さんの何かを知ってるのは瑛司だけで、つまり、その問題を解決できるのも瑛司だけなんだったら、もう答えは自分の中で見えてるんじゃないのか？ 俺に相談するのも、自分の決断に説得力が欲しいだけなんだろ？」

「お前ってほんと、多重人格だよな」

「それって怒っていいところ？」

軽い笑みを浮かべながら、おどけたように星野はそう言う。

憎めないやつだよ。

いや、ほんとに。

「とにかく、具体的な何かを知りたいってんなら答えも簡単だけど、菅原さんのことについて俺にも言えないことがあるみたいだし、俺から言えるのはそれくらいかな。あとは、自分らしさに縛られるなっつてことくらい」

「自分らしさ か」

自分らしさ、っていうニュアンスだけ聞けばポジティブなものだけど、星野が言う、自分らしさ、ってのは、暗に何を示してるかっ

てのはよくわかる。

自分らしさ、というより、要らないこだわり、って感じか。

まあぼんやりしてたものが

「多少見えてきた気がする」

「なら力添えできたってことでいいのかな？」

「ああ、いつも世話になるな。感謝するよ」

菅原にも教えてやりたい、思い出してもらいたい。

こんな風に、友情を噛み締める瞬間ってやつを。

きつと菅原にもあったんだよな 記憶の奥底に沈んでしまっ

ただで、記憶喪失つてのは、何かが消えてるわけじゃない。

というより、そうであってほしい、そう思う。

「で、俺はそろそろ部活行っていいのかな？」

「悪いな、時間とらせて」

「まあ、社長出勤てやつもたまにはおもしろそうだし、俺エースだからたまにはいいっしょ」

「お前エースだったのかよ……」

うちのバスケ部ってたしか、まあまあ強かったよな。

それでエースって……。しかもまだ3年生引退してないだろうに。

「ムードメーカー兼エースってやつ、来年あたり、そこにキャプテ

ンという称号もそこに加わるかもね」

「ムードメーカーって自分で言うやつ初めて見たぞ。てかお前、そ

こまで出世してたのかよ……」

「まあ瑛司みたいな陰キャラには到底たどり着けないような高みさ」

「陰キャラじゃねーっつのーの！」

といういつもの流れ。

俺のつつこみは本音と1ミリもずれてないけど。

「まあとりあえず頑張ってこいよ。結果は自然に耳に入ってくるだろっし、とにかく、楽しみにしてるよ」

「それだけ聞くと、俺が、告白しに行く前の勇気を振り絞った男子生徒みたいだな」

「え、違うの？」

「陰ながらお前に感謝していた俺の気持ちを返せ！」

本気じゃないよな？

尊敬が軽蔑へと一気に逆転してしまう可能性があるぞこれ。

「まあ恋愛経験0の瑛司にそんなことできるわけないかー。女友達だつて紗月ちゃんくらいしかいないしね」

「隠しておきたいプロフィールを脈々と読み上げるんじゃない！」

女友達か……。菅原はどうなのだろう。まだ友達って感じでもないし、知り合いつていうのも安直過ぎる気がする。

「あ、でも菅原さんは……」

「いいから、さっさと部活行ってこいよ」

菅原のことは、まあじっくり考えていけばいいし、今はあいつと関わりがあるつてもあんまり公言しないほうが良さそうだしな。

俺に、守るべき立場なんてないけど、それを守ってるようにも思われたくないし。毒にも薬にもならない選択をするのが一番利口だろう。

「わかったよ。じゃあとりあえず、また明日な！」

「おう」

そんな軽い挨拶があつて、星野は軽快な足取りで螺旋階段を駆けて行った。

相変わらずマイペース、切り替えが早いやつだ。

引きとめたのは俺だけど、精神的な部分つていうか、その辺を上手くコントロールできてる。

単純に生きれたらいいなとは思いつけど、単純そうなやつほど複雑な裏を持つてるもんだ。それこそ、一番単純思考の持ち主は俺なのかもしれない。

そうなつてしまえば、自分らしさつて一体何なんだろうとか、答えの見えてこない課題にまたぶち当たつてしまう。

結局、こんな記憶力を持つていたつて、答えの出ていないものが対象となればなんの役にも立たないつてことだ。

記憶の限界ってどうか、結局その程度のものなんだよな。

翌日、菅原は学校へ来ていたものの、その異常とも言える無気力が手に取るように伝わってきた

本当に現状を受け入れられているのならば、そんなことになるはずがない。やっぱり、菅原だってどうにかしたいと思っているはずだ。

大きな事件にはならないにしろ、依然として噂は火を灯したままだった。

大人しい連中が多い組でさえ、体育の授業に引き続き、菅原という人間なんていないものである、という空気が漂っている。

無視。

無視というより、放置か。

この中に、記憶がなくなる以前の菅原の友人はいたのだろうか。当然俺には見当もつかないし、菅原本人でさえ、それを自分の意志で知ることはできない。

友達であった人物が、自ら名乗り出るしか方法がないのだ。でもやっぱり、そんなことを言い出す人物は現れなかった。

仕方のないことだと思う。いじめを傍観するのも罪だ、なんて言う人がいるけど、それは間違っている。

人間てのは、まず自分を守ろうとするものだ。

それが達成できて初めて、人を助けようと思える。

経験談というわけではないが、無情にも人の本質というのはそういうものである。

俺は何も気にしていないという風にして、自分の席に鞆を置いた。これからやろうとしていることを菅原に話す必要はない。

菅原はそれを否定するだろうし、否定されても 俺は計画を中止しようとは思わないだろうから。

ちらっと教室の時計を確認する。よし、朝のホームルームまであ

る程度余裕があつて、遅刻常連以外はだいたい学校に着いてる時間帯だ。

トイレにでも行くかのように、自然な動きで教室を出る。誰も俺の行動なんて逐一見てはいないだろうけど、念には念を入れておいて損はない。

向かう先はD組。

同じ階の、隣の教室。

菅原の友達だった長谷川夢依はせがわむいがいる所属しているクラス。

俺の記憶力を以てすれば、どんな風貌の子だったかは簡単に思い出せる。

たしか、大人しそうな子だったよな。そうであると助かるのだが、まあそうでなかったとしても、今更引き返すことはできない。

そしてゆつくりと、数えるくらいにしか入ったことのないD組へと足を踏み入れる。

D組の教室は、C組ほどではないにしろ比較的静かだった。

学年トップの成績ということもあつて、俺の顔はほどほどに知られている。

自分の教室に籠つていそうな風貌も相まって、教室全体の注目を浴びることは避けられなかった。

そんな視線を無視し、俺は対象なる長谷川夢依を探す。

意外なほど簡単に、その姿を見つけることができた。

教室の右端、俺がいるドアからのちょうど対角線上。

ゆつくりと、そしてゆつくり過ぎず、あくまで自然体を意識しつつ

目的地に足を運ぶ。

目的地に到着。

なるべく注目を集めないよう、俺は静かに声を発する。

「長谷川さん、だよな？ ちょっと話があるんだけどいいか？」

ちよつと高圧的な言い方になってしまったかもしれない。大事な場面に限って、口癖というものは力を発揮してしまうものだ。

またあとで、個人的に心の中で反省会だな。

「はい……なんでしょうか」

外見と同様、内面も大人しい子であるようだ。菅原と仲が良かった頃、二人の会話がどのようなものだったのか見当もつかない。

「菅原が謝りたいって言うてるんだ。でも、いろいろと噂が……錯綜してるだろ？ それで、俺に呼び出してほしいって言うてきてな。あんまり、時間はとらせないから、放課後屋上まで来てくれるか？」

「菅原さんが……、わたしに？」

「ああ、頼む。あいつも反省してるみたいなんだ。来てくれるか？」

「反省……ですか？ でもそれは」

「あいつを許してやってほしい、と言ってるわけじゃない。一回話をして、判断はそれからでいいんだ。あいつの本音を聞いてやってほしい」

「ちよつと待ちなさい！」

静かな教室に、閃光のような大声が響き渡る。

野口裕子。できれば、登場してほしくなかった人物だ。

「夢依！ 菅原と会う必要はないわよ！」

「おい、ちよつと待てよ！ お前は関係ないだろ。これは当人たちだけの」

「あんだだつて、部外者でしょ」

「っ……」

思わず言い淀んでしまう。

たしかに、俺も部外者だ。長谷川夢依にとつても、そして、菅原魔綾にとつても、何者でもない。

「それに、あいつと会ったつて夢依がまた傷つくだけよ。もうあいつとは関わっちゃ駄目。そう言ったでしょう。あれだけ周りから言われておいて、一切反省しようとしなかったんだから。噂が広まったあとで何か対策をしようなんて調子が良すぎるわ」

「野口さん……私は大丈夫ですよ……私からも菅原さんに言いたいことがあるんです」

「夢依……あなたは優しすぎるのよ。あいつは心から反省なんてし

てない、夢依を傷つけたこと、その理由だって話さないんだから話さないんじゃない、だ。

そんなことを言ったって、説得力など微塵もないのだが。だけど、それでも、あいつには話すべきことがあるはずなんだ。

「それは承知の上だ！ 頼む！ 一回だけ、菅原にチャンスを与えないか！」

もちろん、D組の連中は全員、俺たちに注目の視線を送っている。だが、そんなことを気にしている場合ではない。これくらいしなれば、意味がない。

それだけ、事は大きくなってしまっているのだから。

「夢依、相手にする必要なんてないわ。もう決めたことなのよ。菅原魔綾とは一切関わらないって」

「頼む！ この通りだ！」

プライドとか、強がりとか、そんなものは、過去の記憶に比べればなんの価値もない。記憶を失うことに比べれば、全然 安いものだ。

「ちよっと……！ 急に何よ……！」

俺は、深々と頭を下げていた。言い負かすとか、論破するだとか、そういうことじゃ解決しない論争だつてあるのだ。話し合いだとか、そういうものが最良の選択肢なのかもしれないけれど、そんな単純で綺麗なようには、この世の中は創られていない。

「頭を上げてください！ わたしは……わたしは大丈夫ですから、菅原さんともう一度話し合います！ 話し合いたいです！」

強くしつかりとした声が、D組中に響き渡る。

「夢依……あなたはそれでいいの？」

「はい、わたしは大丈夫です！ ちゃんと、菅原さんの話を聞きたいんです！ ちゃんと、本当の気持ちを知りたいんです！」

唇を噛み締めながら、大丈夫です、わたしは大丈夫です、と長谷川夢依は繰り返す。確固たる意志を強く表そうとしているように。

菅原に、自分の声を届けようとしているかのように。

「そう……夢依がそう言うなら、一回くらいは認めてやってもいいわ……」

「本当か？」

「ええ……そのかわり、本当に一回限りよ。もしそれで、反省の色が見られなかったら」

野口は、その先を言わなかった。

言いたくなかったか、言う必要がないと判断したのかはわからない。

「だいたい、予想はつくけれど。」

「ああ、約束する。絶対、無駄にはしない」

全ては菅原次第なんだが、それでも、俺にはそう言わなくてはならない。あいつが自分で自分を救うための、手助けをする為に、俺は菅原を信じてやらないといけない。

「じゃあ放課後、屋上に行けばいいんですね？」

「ああ、頼むよ」

「あの お名前は？」

「俺か？俺は嘉神瑛司。菅原と同じ組だ」

長谷川夢依は、なぜか安心してしている様子だった。俺の正体が成績学年トップだったということに関してはあまり興味を持っていないらしい。

そして長谷川夢依は、ありがとうございます。と言った。

彼女が感謝の言葉を口にした意味は俺にはまだ理解できない。それでも、その言葉が大きな励みになったことに疑いの余地はない。

当事者本人の口から出た言葉なのだから、俺がしたことは、少なくとも今の段階では間違っていないということだ。

C組に戻ってみると、菅原はすでに登校していた。

何食わぬ顔で柄にもなく読書に勤しんでいる。内容が頭に入っているのか疑わしいところではあるが、菅原にとって、立場を失った

今の時期は、何かに没頭していないとやってられないのかもしれない。

「おい、勤勉なフリしたって今更遅いぞ」

話しかけた直後に思い出した。俺たちは若干言い争ったあとの状態なのだった。

案の定、何事もなかったかのように何をぬけぬけと、といった表情を見せる菅原だった。

もう慣れてしまったというのが本音だが、その眼光はおよそ殺気を含んでいるかのような鋭さだった。

「何よあんだ。あたしのことなんかほっとくんじゃなかったの」

「まあその予定だったんだが、見るに耐えない光景だったもんでな」

「なるほどね。うざい」

「……」

何かなるほどなんだ、おい。

恩を着せるようなことは言いたくないが、俺はお前のために頭下げてやったんだぞ。

まあそれは知られたくない事実でもあるんだが……。

「で、そんなうざお君はあたしに何の用？」

「うざお君か……ひねりがないな」

ピキピキつと漫画でよく出てくる怒りの音が聞こえた気がした。

気のせいだということにしておこう。

「一発殴っていい？」

気のせいじゃなかった。

「殴っていいか聞かれて了承するやつに会ったことあるのかお前は」

「はいはい出ましたお得意の屁理屈」

屁理屈じゃない、理屈だ。

てか、そんなことより

「お前、長谷川さんと仲直りしろよ」

菅原の表情が一瞬曇る。

そして、ギラッと俺を睨みつけて言う。

「なんであんたが長谷川さん知ってるのよ。はあ、あんたも噂に流される連中と同じってわけね。あんたも同じ、そこらの連中と同じよ」

「長谷川さんに会ってきたんだよ」

「はあ？ 何勝手なことしてくれてんの！ 余計な心配は無用って言ってるでしょ！」

「心配なんかしてねーよ。仕事を消化したまでだ」
なんて、ちよつと意味不明なことを言ってみる。

心の中でリピートしてみても、本当に意味不明なセリフだ。だけど、口から出てしまったものはもう収集のしようがない。

「仕事って何よ。あんた長谷川さんに会ってどうしたの」

「お前と会って話してくれて言ってきたよ。今日の放課後だ」

「あんたつてのは……ほんと、ほんとにうざい……」

「うざくてもなんでもいい。とにかく、行って話し合ってこいよ。お前だけじゃない、長谷川さんだって今の状況をなんとかしたいと思ってるんだ。お前を信じた上での行動なんだよ。無駄にしないでくれ」

先に菅原に作戦を説明しなかったのも、無理矢理状況をつくってやらないと拒否するだろうって考えたからだ。

無理矢理つくったって、拒否されるかもしれないが、そこはもう菅原を信じるしかない。

選択肢はひとつしかないのだ。

「信じた上でって」

目を伏せて、声のトーンを落としながら菅原は続ける。

「あの子になんて顔をして会えばいいのよ……友達だった頃のこと
が一切わからないのに、何を話せばいいの……。怖い あの子に
会つのが、でも、あの子にとってわたしに会うことは、もっと怖い
はず」

それはたしかに、そうかもしれない。

いきなり菅原から切り離され、それが学校中で噂になり、その当

人同士がこれから話し合うだなんて。菅原以上に、長谷川さんのほうが辛いのかも知れない。

もしかして、菅原はそこに思い至ったから、長谷川さんと会いたくないと言ったのかも知れない。

でも それは間違ってる。

それじゃあ何も解決しないだろ。

もはやリスクなしで解決するような問題じゃないのだから。

「それでも、長谷川さんはお前に会いたがってたぞ」

「え……？」

「たしかに、お前と会うのは怖いと思ってるかもしれない。けど、それ以上に、お前との友情を取り戻したいって気持ちのほうが大きかったんだろ。だから、ちゃんとした意思を持って、お前に会いたいって言った。たぶん、何か理由があったんだろってお前のことを信じてるんだよ。お前には、その気持ちに答える義務がある」

と、そこで、朝のホームルーム開始を知らせるチャイムが鳴り響いた。それと同時に、担任松本が教室へと入ってくる。

「おいチャイムは鳴ってるぞー。席につけよー」

松本が教室全体を見渡しながら生徒たちにそう促す。

「とにかく、放課後だからな！ 放課後屋上だ！ 絶対こいよ」

そう言い放って、俺は自分の席につく。

あとは野となれ山となれだ。

しかし、正直なところ微妙な作戦だったと思ってしまう節もある。いつもの俺ならもっと有効的な戦略を練ることができていた気がするし……。

やはり、自分の為の行動ではないということが大きいのかも知れない。特に、菅原なんていう傍若無人、暴言毒舌の塊とも言える人間が対象だし、少々俺の頭が混乱していたっておかしくはないだろう。

混乱。

困惑。

本当に、新学期早々にして精神的に忙しい。

しばらくすれば、いつも通りの日常が戻ってくるのか。いや、俺自身が、戻ることが出来るのだろうか。

そして、菅原との関係はどうなるのだろうか。

お互いの秘密を知ってしまった上で、どう接していくことになるのだろうか。

そんなこと、今考えたところで納得のいく答えが導き出せるとは思えないのだが。

これほどにまでわからないことだらけつても随分珍しい。

時の流れは早い、とは良く言ったものだが、これほどにまでそれを実感したのは初めてかもしれない。1から6限まで、授業内容を簡潔に説明してみる、と言われてさらっと回答できるものがない。それほど集中力を欠いていた。帰りのホームルーム真っ最中である今もそうだ。

ある意味、集中力を欠いていたというのは間違いかもしれない。

別のことに頭を巡らせていたのだ。

つまり、菅原のこと。

今日の放課後のこと。

結局、朝の会話を最後に菅原とは話していない。これ以上無理矢理促そうとしたところで、悪影響だと判断したからだ。あーいう頑固なタイプの人間は、一度考える時間を与えたほうがいい。

自分を例に挙げるとわかりやすい。

俺としては、とんでもない皮肉。

あんなやつと似ている部分があるなんて、なるべく信じたくないが。

それでも、周りにある種の壁を築いている人間は、同系統の人物を見つけやすくなるものだ。

同系統か……。外部から見分には、そんなふうには到底見えな
いんだろうな。

そんなことを考えているとあつという間に時間は過ぎ、放課後
を迎えた。

放課後。

屋上で、長谷川さんと菅原が待ち合わせる時間だ。

念のため、最後に一言菅原に言っておいたほうがいいだろう。ま
だ迷ってるのかだと困るしな。

と、鞆を肩にかけ、菅原のいる最後尾の席の方へと体を捻る。

いない

すでに、屋上に向かったと判断していいのだろうか。

それとも……。

ここで悪い癖が発動してしまった。全てをネガティブに考えてし
まう、という厄介なやつだ。しかし今回はこれが必然なのではない
だろうか。菅原を結局説得できなかったというのが正しい結果だ。
あとは菅原を信じるだのなんだの綺麗な言葉は並べてみたが、結局
それは自分の力量の小ささ加減を隠すための言い訳だったのではな
いだろうか。

いろいろと、間違っていたのかもしれない。

考えてる暇があれば行動しろ、と誰かに言われたことがある。そ
のときは、それこそ綺麗事だのなんだの思っていたが、今はまさに
それを実行すべき状況に置かれている気がする。

いや、事実そうなのだ。

帰りのホームルームが終わった直後は、一、三言星野と世間話を
してから帰る、というのが毎度の恒例行事だったが、そんな些細な
日常は軽くスルーし、俺は勢いよく教室から飛び出した。

くそ、やっぱり螺旋階段って意味わかんねえよ。

この走りにくさといったらこの上ない。

もしかして、校内を走り回る学生予防としてこの螺旋階段を建設したのではないだろうか、そうだとすれば感心を通り越して敬服する思いだが、蓮実高校の適当さ加減を考える限り、たぶんそんなことはないのだろう。

その一方で、自分の体力のなさには呆れるばかりだ。

階段を降りているだけで息を切らしてしまう始末。

まあ走っている、というのがあるんだが、それを踏まえてもこの貧弱さには見下げ果てたものだ。

そうこうして、校舎の玄関にたどり着いたものの、人影はほとんど見られなかった。

まあ、ホームルームが終わった瞬間、教室を出るやつもなかなかいないだろうし、担任である松本はなるべく早くホームルームを切り上げたがる教師で、2年C組ほど早く放課後を迎えられるクラスはほとんどないから、一応必然の光景ではあるんだが、それでも菅原の姿が見えることを期待していた俺にとっては、見た目以上に殺風景な感じに見えてしまう。

本当に、殺風景だった。

風もなければ鳥の鳴き声も聞こえない。

街中であって、街の騒音が一切入ってこない学校として知られるとはいえ、なんだが世界で自分一人だけが生き残ってしまったような感覚さえ覚えてしまう。

いわゆる、絶望というやつ。

菅原が見つからなかったというのは、絶望とまではいかないにしても、俺としてはかなりショックな出来事だ。

そんなことを考えていると、他クラスの連中もぞろぞろと螺旋階段を降りてきた。

殺風景でこそなくなったものの、それはそれでまた時間的に長谷川さんが屋上へ向かう時間になってしまったことを認識した。

菅原のいない、屋上に。

いやまあ、すでに菅原は屋上へ行っている、なんてことはないだ

ろうか。

もしそうだとしたら、願ってもないことだ。

無理矢理そう解釈し、俺は再び、走るまではいかないが気持ち早足で屋上へと向かった。

途中、星野やC組である程度面識のあるグループとすれ違ったりしたが、星野はあえて何も言っでこなかった。

挨拶もせず、無言のメールを送ってくれていたのかもしれない。別に俺が何をするというわけでもないのに。

他の連中とは、菅原のことに関して話したことはない。俺が菅原と多少の関わりを持っていることはすでにバレているはずだが、それを咎めるどころか、指摘するやつでさえ一人もいなかった。

そう、C組の連中はたいていがいいやつなんだ。

それでも、噂というものはどうしても広まってしまって、全く無関係の人間にある種の疑念を植えつけてしまう。それで、菅原は自然と一人になってしまった。

誰かが敢えて菅原を一人にしようとしたのではなく、ごく自然に。

そう考えると、やはり一連の騒動に加害者というものは存在しないのだろう。

だからこそ、解決の糸口を見つけるのが難しい。

誰かに罰を与えればとりあえあずの解決をみる刑事裁判とは違う、どちらかというと、民事裁判？

いや、それも違うな。そもそも、法律で片付く問題と一緒にしてしまっではいけない。人間関係、ましてや高校生の人間関係なんてものに、法律の力など必要ない。もし必要な場面がでてきたのだとしたら、きつとそれは最悪な場面だ。

そして俺は、とうとう屋上へと繋がる扉へと到着してしまった。

扉は完全な金属製で、外の様子は窺い知れない。

なんで屋上を集合場所を選んでしまったんだろう。目立たないという条件を満たした場所ならいくらでもあったはずなのに。

今日何度目かわかないが、また、自分の力量のなさに呆れかえる。成績学年トップが冷静沈着完全無欠なんて出来過ぎた話だしな。現実はそのも甘くない。

俺は決意を固め、天地を分ける扉のドアノブを握る。心なしか、いつもより重く感じられた。

扉の向こう側、そこにいたのは、長谷川夢依と野口裕子だった。

二人だけ。

菅原はいない。

「なんであんたが来るのよ。当人様はまだ到着していないみたいだけど」

鋭い口調で野口はそう言い放つ。菅原ではなく俺が現れたことへの、驚きというより失望したといったような表情で。

「菅原さんは 来てくれるんですよね？」

野口に続き、長谷川さんもそう尋ねる。

何を言っても逃げることができそうにない。

逃げる……いや、違う。そうじゃない。これまでの熟考の結果が、逃げるだなんてそんな無粋なものではなかったはずだ。どれだけ小心者なんだ俺は……。

「菅原は必ず来るはずだ。だからもう少しだけ待つてくれ」

来るはず、という言葉。例えそれが本心から出た言葉でなくても俺はそう言わなくてはならない。

そういうことにしてしまったのだから。

「でも、C組は随分前にホームルームを終えていたはずよね？今の時点で来ていないってことは、逃げだしたってことじゃないの？」

「それは違う！」

「何が違うって言うのよ。菅原はやっぱり夢依と会うのが怖くて逃げたんでしょ？自分の罪を認められずに、そのせいで自分が教室の隅に追いやられたことに耐えきれなくなって、なんとかしようとしたのかもしれないけれど。そういう理由があつての行動であつて、夢依に心から謝ろうなんてこと」

違う　それは絶対に違う。

菅原の言い分は聞いたし、それを聞いてなかったとしても、俺は今野口が言ったことが間違いであると、確信を持ってそう言える。理由だとかそんな理屈的なものは確かにない。けれど、絶対にそれは、それだけは違う。

「だから何が」

「嘉神さん」

長谷川さんが、野口の言葉を遮る。

「嘉神さん、わたし、C組の教室の様子を一回だけ見に行ったことがあるんです。そのとき、嘉神さんと菅原さんが話しているのをちょっとだけ見ました。なんていうか、すごく楽しそうで……楽しそうではないんですけど、心の中はきつと楽しそうで……。なんて言ったらいいかわからないけど、とにかく、嘉神さんは菅原さんとすごく仲が良いのが伝わってきました。きつと、一昨日菅原さんに何があったのか聞いてるんじゃないですか？　あの、もし良かったらそれを聞かせて欲しいんです。菅原さんがここに来なくても、嘉神さんの口からでいいので、真実を聞きたいんです」

長谷川さんも当事者なんだから、真実は見たまんまだろ、とは言えなかった。

そう言えば、一応の工作にはなったかもしれないけど、それで菅原の秘密を隠したところで、それは何の意味も持たないだろう。

やはり、言わなくてはならないのだろうか。

信じてもらえるかどうかは別の話として、菅原の秘密を話してしまわないと、この問題は解決しないのだろうか。

「あいつは　菅原は、わざと長谷川さんに一昨日のような態度をとったわけじゃないんだ。あいつの記憶は」

そこで、タイミング的には良かったのかそれとも悪かったのか、大きな音をたてて、屋上から螺旋階段に繋がる扉が開いた。

そこまでの演出が必要なのかって思うくらい、眩しい光に包まれ

たかのように、菅原魔綾は登場したのである。

実際に光に包まれているわけじゃない、何か眩しく見えたのだ。おそらく菅原本人が。

何がそこまで不満なんだと言いたくなるようなキリつとした表情、すらつと高い身長に、煌びやかに光るクリーム色の長髪。

単純に見たままの感覚で形容するならば、まさに天使のようだった。

この状況だからってのもあると思うが、むしろ俺が菅原に救われているような気さえしてくる。

長谷川さん呼び出したのも、菅原のためにやったことではあるのだが、それでも、俺は自分のためにこうして屋上に来ていると、なぜかそう感じてしまう。なんだろうこの感覚は……菅原の突然の登場に気が動転しているのだろうか。

「何勝手にぺらぺらと人のことをしゃべってるのよあんたは」
そう言っつて少しづつ前へ歩み出す菅原。

俺は何も言えなかった。野口や長谷川さんも、遅れて登場した菅原に対して何も言葉を発さなかった。

「いや、正しくは、発せなかった。」
「わたしを信じたんなら、最後まで貫きとおしなさいよ」

俺の前を横切りながら、菅原はそう言った。

「んなこと言われてもなあ、登場するタイミングがぎりぎり過ぎるんだよ」

「まあいいけど。あんたとはそのことはあとでたっぷり話しましょう。今は長谷川さんと、話さないといけないから」

そんなことで、あとで怒られなくちゃいけないのかよ。
せつかく、少しはお前のこと見直したと思ったのに。

「ちよつとあんた、人を呼び出しておいて詫びの一言もないわけ？」
「ごめんなさい、野口さん」

菅原から出たのは意外にも素直な言葉だった。それに対して、野口はなんとも反応し辛い風になっているし、俺も当人だったらそんな

つていただろう、キャラが変わりすぎだ。

そして、その『ごめんなさい』という言葉は、ただそれだけの意味じゃないのだろう。

言い争ったときのこと、今遅れて来たこと。

それ以外にも、もしかしたらあるのかもしれないが、そこまではわからない。

しかし、菅原から発せられた言葉たちは、いつにも増して重みを含んでいるように聞こえた。

俺とふざけた口論をしているときは全く違う、真剣なトーン。

「もうちよつと何かあるでしょう。なんていうか、こう……」

「わかつてる。でも、今はあなたとやりあつてる時間はないの」

言い淀む野口に対して、軽く受け流す菅原。

三日前の光景が嘘だと思えるくらい、妙に圧倒的な差がそこには生まれていた。

やっぱり今ここにいる菅原魔綾は菅原魔綾ではないのではないか。そんなどうでもいい懸念さえ抱いてしまう。

そして菅原はゆっくりと、ゆっくり過ぎるほどゆっくりと、一歩一歩長谷川さんのもとへ足を運ぶ。

「長谷川さん、謝って許してもらえるようなことだと思つてないけど、それでも言わなくちゃいけない……優しくしようとしてくれたあなたを突き放して、ひどいことを言つてごめんなさい」

後ろに立っている俺からは菅原の表情を読み取ることができない。だけど、聞こえてくる言葉だけで十分、菅原がどれだけ後悔し、悩んだか、はつきりとわかる。

菅原は、記憶を失って自暴自棄になっていた、なんてことはもう言わなかった。言う必要がないと判断したのだろう。仮にそれを信じてもらえたところで、長谷川さんや野口の菅原に対する怒りが軽減されたところで、菅原にとっての後悔は消えるなんてことはないのだから。

「菅原さん……謝らなければいけないのは、わたしのほうなんです

「！」
突然だった。

「夢依、それってどういうこと!?!」

「悪いのは一方的にわたしのはずよ。どういう」

長谷川さんは菅原の言葉を遮って続ける。

「わたし、あの日の朝から菅原さんの様子が変だったのには気付いていました。だからわたしのことを無視したり、ひどいことを言うのにも何か理由があるんだってわかってました。でもそれを聞くのが怖くて……わたし怖かったです！ その理由を聞いてあげるのが……。それができなくて野口さんや他の人に相談してしまつて……。それで、変な誤解を生んでしまつたんです。そのことで噂が広まり始めてからも、わたしは何も行動できませんでした。いや……たぶん、できなかつたわけじゃないんです。このまま被害者面をしているほうが、わたしには何の害もなく、変に行動したら……とか、そんなことを考えてしまつて……。わたしは、とっても弱くて卑怯なことをしたんです……」

「夢依……」

衝撃的な事実だった。

もとい、長谷川さんが菅原に復讐をしようだなんて考えを持つていないんだろぅなということは、初対面の段階で判断できたことではあるが。まさか彼女までもが、罪悪感を抱いていたなどということとを予想するには至らなかつた。

それにしても、人間性というか、内面がこれほど外側に表れているやつはそういないよな……。

心から優しい人間なのだということくらい、容易に判断できる。

それでいておそらく、傷つきやすい。

「ごめんなさい……泣くつもりはなかつたんです。もう泣かないつて決めたのに……」

消え入りそうな声でそう呟く。

自分のせいで菅原が多くの人から誤解を受けた。それに対する罪

悪感がどれだけ彼女を苦しめたのか、俺には想像もつかない。

それはたぶん、当人じゃないとわからない感情なんだろう。

「全部正直に話してくれてありがとう。今度はわたしの話を聞いてくれる?」

今までの、俺との会話からは想像もつかないような優しい声で菅原はそう言う。

「はい、もちろんです……」

涙を拭い、これ以上は泣かない、という決意を持って、長谷川さんは菅原を真っ直ぐ見る。

それもそのはず、長谷川さんは菅原の本心を聞くことをどれほど待ち望んでいたか。それがわからなくて、彼女は悩み続けたのだ。

罪悪感を持ち続けていたのだ。

「わたし、記憶を失ったの」

「おいまで、菅原!」

それを言ってしまうのか。

それを言ってしまうえば、また別の問題が生まれくるじゃないか。

「いいの。だって、嘘ついたって、何を言い訳にしたって結局は言い訳になるのだから。本当のことを言ったほうがいいでしょ。それに」

それに

長谷川さんには、嘘をつきたくない。

菅原は、俺にだけ聞こえるようにそう言った。そしてまた長谷川さんのほうへと向き直る。

「だからわたし、長谷川さんのことを覚えていないの。新学期が始まったその日に、笑顔で話しかけてくれたあなたのことが誰なのか、全くわからなかった」

「ちよつとあなた! いい加減に」

「嘘は言っていない」

「あなたは関係ないでしょ。わたしは菅原に」

「嘘は言っていない。本当なんだ、菅原は記憶を失ってる」

定期的に記憶を失う、とまでは言っていない。
だから、あり得ない話でもない。信じてもらえる可能性も低くはないはずだ。

例え野口でも、常識のないやつってわけじゃなさそうだし。

無論、長谷川さんも菅原の言葉を信じるはずだ。

だけど、ほんとにそれでいいのかよ菅原！

長谷川さんは、その事実を最も信じたくない人でもあるんだぞ。

「本当なんですか……菅原さん……」

「本当よ。でも、それがあなたを傷つけていい理由にはならない。

本当にごめんなさい」

「違います！ わたしは、菅原さんに謝ってもらったためにここに来たんじゃないんです。真実を知りたくて、菅原さんが何について悩んでいるのかが知りたかったんです。ただそれだけでよかったです……。でも、わたしのことは覚えてないですよ……菅原さんにとってわたしは、全く知らない人で……」

全く知らない人。

一方的な友達。

辛いのは菅原だけじゃなかった。

当たり前のようで、気付きにくいことでもあった。菅原に忘れられてしまった人は、同じように辛いはずなのだ。

日々の積み重ねで深まっていく友情というものは、簡単に取り戻せるものでもないだろうし、菅原側からは、誰とどんな風に何を取戻せばいいのかさえわからない。

記憶喪失になってしまったと学校中で言い歩いて回ることもなんてもちろんできるわけがないし、お互い何も知らないままになってしまふ。

今回の件のような問題が発生するのも、ある意味必然だったのかもしれない。

「全く知らない人なんかじゃない。長谷川さんはわたしのことを知

ってるんだから、友達だと言ってくれるんだから、それは、きつとそれだけでいいの」

菅原のその言葉に、長谷川さんは答えることができなかった。何を言えればいいのかわからなかったんじゃない。菅原に伝えたいことは、きつと数えきれないほどあるに決まっている。

ただ、次々と流れてくる涙のせいで、上手く言葉を発せないでいるのだ。

もしくは、言葉にならない、というのもやっぱりあるのかもしれない。

「記憶がなくなっただって、記憶喪失ってことよね。まさか、三日前に言っただことは本当だったってこと？」

「そうよ。あの時にあんな形で言っただけで信じてもらえないわけがないのに、わたし馬鹿だったわ。でも今は信じてほしい。本当に記憶を失ってしまったの」

「それで、自暴自棄になってしまっていた。ということでもいいのね？」

野口は、菅原が本当に悪意をもってやったことではないと、それを入念に確認しようとした。最初から、そう思ったかったのかも知れない。

「そういうことよ。そんな理由が通用するとは思っていないけど」
通用するしない、の問題ではないと思うけどな。

記憶喪失になった人間の気持ちなんて、記憶喪失になった人間にしかわかるはずがないのだから。

「で、あなたは結局どうしたいの。夢依はこんなにあんたのことを大切に思ってたってわかったと思うけど」

野口は、もう俺たちと対立しようという気持ちはどうやらないようだ。

あるいは、そんな感情など最初からなかったのかもしれない。

長谷川さんへの友情故、言動が少し暴走していただけで、彼女も、ただ不器用さが裏目に出てしまっただけなのかもしれない。

あれだけ感情的になつていたのも、やっぱりそれは友達を思いやる強さの証でもあるのだろう。

「それは、そんなことは、三日前からわかつてたわ。長谷川さんがわたしに対してどれだけ心配してくれてたか、どれだけ大事に思ってくれてたかなんてことは、最初からわかつてた。何度言つても足りないと思うけど、何度でも言わなきゃいけないと思う。いや、わたしがつうしたいの」

一瞬の間を置いて、

「本当にごめんなさい」

菅原の言葉を聞き、言葉にならない感情を無理矢理表わそうとしているように、長谷川さんは何度も首を横にふる。

そんなことない、悪いのはわたしだ

そう言いたいのだろうか。

でもこれって、一応和解は成立したつてことだよ……。でも、何かまだ煮え切らない何か点が点在していて、上手くまとまっていない。

何か足りないのだ。

全て丸く収まった、解散しよう、という流れにはならない。

「菅原。謝るだけじゃ何も解決しないんじゃないのか。それがわかつてて、こうするのをためらつてたんだろ？」

「ためらつてたんじゃないわ。こうするつもりなんてなかったの」

「ちよつと、それつてあんた……」

「おい菅原」

そんなことは、ここで言つべきじゃないだろ。

長谷川さんと野口がいる前で、話し合つつもりなんてなかった、だなんて言つべきじゃない、絶対に。

「だけど、ここに来て、こうして長谷川さんと話してよかったと思う。考え直してよかった。全部あんたのおかげよ」

「おま……」

なんだこの感じ。

やっぱり、お前菅原じゃないだろ。

もしくは

「これこそまさに…… ツンデレ……」

「それ余計！」

ボケとつつこみの担当が逆転した瞬間だった。

今このタイミングですべきやり取りではなかったかもしれないが、まあとにかく、と菅原は仕切り直す。

「わたしを信じてくれるって言ったでしょ。だから最後まで貫きとおしなさい。この場はわたしを信じて、任せてくれればいい。そもそもわたし自身の問題なんだし」

「ああ、わかったよ」

たしかに、これは俺の問題じゃなくてあくまで菅原本人の問題だ。俺が口を出していいのはその過程まで。この場は菅原本人に任せるのが賢明だ。

というより、そうしなければならぬだろう。

菅原の言うように、俺はこいつを信じると明言したわけだし。

「菅原さん……わたしにももっと言わせてください……本当にごめ

」

「もういいの」

菅原は言葉を遮り、そして一歩づつ長谷川さんへと歩を進める。

「謝るなんてものは、もういいの。わたしのほうはまだ謝り足りないと思うけど、でも、少なくとも長谷川さんはもう、謝らなくていいわ」

「菅原さんも、もう謝らなくて大丈夫です」

長谷川さんは、涙をこらえながらそう言った。

強い意志をもって、本気の言葉が菅原に伝わるように。

「そう ならよかった」

俺からは死角で見えないが、菅原の表情は手に取るようにわかる。俺には見せたことのないような、優しい表情なのだろう。

時として、言葉よりも多くを語るものが存在することがある。

聞くのではなく、感じる。

今の菅原は、全身からなんらかのオーラを出しているようにさえ見える。

そういった四次元的なものを信じるのは不得意分野というか、あんまり好きじゃないが、今はそれ以外に形容することが難しい。

一言で表すならば、やっぱり『天使』のようだ。

これだけ褒めちぎっているのを、本人には絶対聞かれたくないな……。

「長谷川さん　これだけ、最後に言わせて」

天使のような、菅原の両手は、そつと長谷川さんを抱きしめた。

そして菅原は、おそらく、普段は無愛想な彼女が全身全霊を込めてできる全力の優しい声で、全てを包み込むような声で、こう言った。

「記憶がなくなる前のわたしに、こんな素敵なお友達がいてよかった

」

想像を遥かに超えた、とても綺麗な言葉だった。

裏も何もなく、言葉そのものの意味が、ここで必要な全てだったのかもしれない。

何かが足りないと思ってしまう状況は一転。

これじゃあ非の打ちどころがないよな……。

これはあくまで菅原の問題であって、俺の問題じゃない。

それはもう何度も自分に言い聞かせた言葉ではあるのだが、やっぱりそれはただの言葉でしかない。

俺は素直に嬉しかった。

菅原と長谷川さんが、ひとまずの綺麗な解決を見せたこと。

よく使われる言葉を引用するなら、これはまだ始まりに過ぎない

のかもしれない、けど、それでもやはり、ひとつの節目にはなるの
だろう。

人が小説やドラマで、他人の幸せに感動するように、俺もそれに
似たような状況になっているだけかもしれない。それがまあ現実と
いう形で目の前で起きているのだから、俺の感情表現が大袈裟だ、
ということでもなさそうだ。

素直に嬉しいのだから、嬉しいと言って何が悪い。

厳密には、心の中で反芻しているだけなのだけだ。

そういう感情って他人には知られたくないものだしな。まさか俺
だけじゃないよな？ この考え……。

でも、他人に感情をさらけ出すってのも悪くないことなのかもし
れない。

この一件を期に、そんなことすら考えてしまう。

妙にポジティブな感じが長期間続いてくれればいいものなんだが、
人間が一日で変わるなんてそんな都合のいいように世界は創られて
いないだろうし、まあ努力って言葉はその所為であるようなもんだ
しな。

時間はといえば、夕日がすぐにも沈もうとしている頃だ。思っ
た以上に時間が経ってしまったていたらしい。

先ほどツンデレが発覚した菅原魔綾であるが、菅原と長谷川さん
に便乗して、涙ぐんでハンカチを取り出そうとしている野口裕子
を見る限りでは、こいつもまたツンデレということでもいいのだろうか。
こういう感じで、この三人の人間関係が元通りに、上手い具合に
戻ってくればいいなと思う。

菅原と野口が果たして知り合いだったのか、という謎が残るが、
なんとなく、友達とはいかないまでも、知り合い程度ではあったの
ではないか、というのが俺の予想である。根拠はもちろんないけれ
ど、根拠なんてものは必ずしも必要なものではない、なんてらしか
らぬことを言ってみる。

ちなみにだが、後から聞いた話によると、今日の下校時刻を告げ

る鐘はなんらかの不都合で鳴らなかつたらしい。

俺たちの邪魔をすまいと神様がちよつとした手助けをしてくれたのかもしれない。

あるいは、確たる立証ができない何か起きたのかもしれない。

下書き中（前書き）

また下書き中なので読まないであげて！

下書き中

一件落着。

そんな簡単な言葉で表してもいいような事件ではなかったのだが、それでもとりあえずの区切りを迎えたと言ってもいいであろう、菅原と長谷川さんは見事に仲直りを果たした。

仲直り、というのは語弊だったかもしれない。実際にお互いがお互いに嫌悪感を抱いている瞬間なんてのはなかったのだから。

そこでやっぱり最も重要なこと。

菅原には、記憶が定期的に失われてしまう、という事実上の問題が残ってはいるのだが、その解決策を見出すにはまだ時間がかかりそう。というか、まだその一端すら見えてきていないのでどうしようもない。

俺に関しても、このどうしようもなく人力を超越した記憶力、これも依然としてそのままである。

菅原とは違って、無理にでも消滅させなければならぬものでもないのだが、3年以上もこのままでは飽きてくるというか、実際、忘れたいことが山ほど出てくるといふものだ。

こういふ言い方をすると、なんだが大した問題じゃないのでは…と誤解されてしまいそうだから言い直しておく、実はすごく悩んでいる。

贅沢な悩みかもしれないが、成績が学年トップ、というのは非常にプレッシャーのかかる称号なのだ。

変なプライドが相まって、今更学年トップを他人に譲るつもりはさらさらないのだが、それでも結果的にそれが何か悪いものを連れてくる、ということとは避けられない事項なのかもしれない。

努力で得たものでもない。

良心で得たものでも、もちろんない。

つまりは、運が良かっただけ。

俺としては、運が良かったとも思わないのだが（菅原の前では口が裂けても言えない）、他人からしてみれば、あいつは恵まれてるとか、そんな風に見えてしまうのだろう。

俺の場合は、人に話しても信じてもらえないようなものではなく、一般例を挙げてみると、生まれつき体格に恵まれていたとか、裕福な家庭に生まれたとか、それらと大して変わらないのではないかと思う。

ケースがあまりにも希少だっただけ。

それだけの小さな差なのだ。

人から羨まれるようなものってのは、たいてい生まれつき備わっているものなんだと思う。

努力では取り返しのつかない、あるいはそれが困難を極める。そういうったものに、人は惹かれ、羨むのではないか。

そんなことが現実には、具体的な問題となって自分の身に降りかかってくるとは思えないが、それでもやっぱり

今日も不吉な予感がするのであった。

今日もいつも通り、余裕をもって学校に登校した俺であったが、特に何をするでもなく星野やその周辺のやつらと実のない会話をしていた。

一週間。

菅原と長谷川さんの一件が片付いてから早一週間が経過した。

菅原のC組での立場はというと、相変わらずといえは相変わらずなのだが、避けられているという風ではなくなった。

それも、毎朝長谷川さんはC組に来て菅原と楽しそうに話をしているみたいだし、野口もちよこ顔を出しているからだ。

大っぴらに情報公開をした、というわけではないのだが、菅原の噂にはどうやら誤解があったらしい、ということに関して誰もが納得し始めたという頃合だ。そもそも興味がない、というやつらが

半だとは思うがな。

そんなわけで、俺の仕事はひと段落ついたってことだ。

菅原もその辺は認可してくれたらしく、あれから俺にとやかく言ってくることはなくなった。なんだが煮え切らない感じではあるが、それはそれで良かったのだろうと思う。

「なんだ瑛司、いつも以上に鬱っぽい顔してるけど。また意味のない考え事か？」

黙っているやつには必ず声をかけてしまう性分、星野である。

「俺の考え事が無意味とは……お前も浅はかなやつだな。で、別に鬱になってるつもりはないんだが」

「あれか？ 菅原さんのことで何か悩み事でも？」

鬱になってるつもりはないって言ってるのに……。

それよりも

「なんでそこで菅原が出てくるんだよ」

まあ菅原の事に関して、一応の整理をしていたことは事実だが、なんでそれがわかるんだこいつは。

星野が何も考えてなさそうな顔をしているのは、実はエスパーで、考える必要がないから、なんてことはないよな……。

「いやー最近、瑛司と菅原さん全然会話してない感じだからさ。そのことで悩んでるのかなって思ったわけよ」

「それで俺が鬱になると？」

「全部の辻褃が合うだろ？」

「辻褃云々の前に、そもそも謎が登場してない！」

謎があるとすれば、お前がエスパーかどうかってことくらいだ。

「菅原さんのことで、瑛司が泣きそうになってるってことと辻褃が合うじゃんよ」

「情報が肥大化されてるぞ！ 泣きそうにはなっていない！」

そしてもちろん、鬱にだってなっていないぞ絶対に。

あるいは、俺は常に鬱なのだ。

「全くもって瑛司はツンデレだな。男の俺の前でデレたって仕方

ないのにさ」

「お前は本物のツンデレを見たことがないからそう言えるんだよ。

菅原なんてやばいぞ」

「ほら、また菅原さんが出てきた」

「う……………」

俺としたことが。

まったくの不覚だった。

星野の、俺がツンデレだという発言に対してはあと2、3発つっこんでやりたかったんだが、それどころではない。

ていうか、ツンデレツンデレ言い過ぎな気もしてきた……………。

そもそもツンデレって言葉は安直過ぎてあんまり好きになれない。怒りの表現を「ツン」で表すとか……………怒りという感情をなめてるとしか思えないよな……………。

「やっぱ菅原さんのこと気になってるんだろ？ 素直じゃないよな！ まったく」

「でもお前、一週間前のことに対しては触れてこないんだな……………」
別に聞かなくても、それは星野なりに気を使っている、ということなんだろうけど、好奇心というわけじゃないがそれでもやっぱり聞いてみたかった。

俺が星野に相談して、その結果は聞かなくてもあとからわかる、みたいなことを星野は言っていたが、やっぱりそれってエスパーなんじゃないの？ とか思ってしまう。

「話しにくいことなんでしょ？ それなら無理矢理聞こうとは思わないよ」

「お前、途端にかっこいいキャラに変貌するよな」

「瑛司はいつも友達いないキャラだよな」

「前言撤回！」

褒めるとすぐ元の星野に戻るってのはいつものパターンだ。

ていうか、友達なはずのお前が、友達いないキャラって言うてきちゃ駄目だろ。

相当傷ついたぞ。

「まあでも何事もなかったし、俺の心配には及ばないってことでしょ？ それよりももつと春らしい内容のことを聞きたいんだよ」

「春らしいこと？ 抽象的過ぎてわからん」

「いやまあなんとなくわかるけど。」

俺には縁遠いことだったのはなんとなくわかる。

「それなのに瑛司は冬らしい話しかしてこないし」

「冬らしいってなんだよ！ それは抽象的どころか言葉としてそういう表現は存在しないぞ！」

そのままの解釈しかできない。

雪だるまの話とか、もつ鍋の話とかになるぞ。

「いやほら、もつ鍋の話とか」

「そのままの解釈で合ってた！」

もつ鍋の話なんか持ちかけたことないけどな！

もつ鍋の話ばっかしてくるやつってどんなキャラだよ。俺はそんなにたましいキャラじゃない。

「お、今日もD組から来客みたいだぞ。瑛司はいかなくていいのかわかる？」

いつも通り、長谷川さんと野口がC組に遊びにきていた。

野口に関しては遊びにきたというより、毎日菅原と口論を繰り広げているわけだが、あれはあれで仲が良いという見方をしてもいいだろう。

「俺は行かなくていいんだよ。あいつら仲良くやつてるみたいだし」

「瑛司も一応、長谷川さんたちと面識あるんでしょ？ なら別に、」

一人だけ敢えてグループから抜ける必要も理由もなくていい？」

「あんな女子だけのグループに属せるわけねーだろ。俺を誰だと思つてやがる。天下の一匹狼、嘉神瑛司様だぞ」

「一匹狼って……、友達少ないやつが無理矢理かつこよく表現するときに使う決め台詞じゃん」

「やめろ！ 俺が意外とミーハーだ、みたいなことを言うな！」

プライドは俺の命なんだ。

そこだけは掘り下げないでいただきたい。

「嘉神さん！」

と、声をかけてきたのは長谷川さんである。右端の席にいる菅原のところから左端の星野の席までは端同士とは言えど、教室内なので10メートルほどしかないのだが、100メートルくらい離れるんじゃないかと疑ってしまうくらい元気に手を振っていた。

長谷川さんて無口で大人しい子かと思ってたけど、実はそうでもなさそうなんだよな。

菅原と和解してから、学校で見かけるたびに楽しそうにしている気がする。それはまあ非常に良いことなんだけど……、菅原も長谷川さんの前では笑顔振りまいていて、それがどうにも気色悪いというか、らしくないというか、俺と1対1のときの態度がいかに悪かったかっつのがわかる。

さて、そんなことより俺はどう反応すればいいんだろう。

俺に女友達なんて、紗月くらいしかいないと思ってるのがC組の連中の大半だからな。無垢で可愛い女子に俺が手を振られてるとなると、そういうことに縁遠い男子から痛い視線を浴びせられることになる。

ていうか浴びせられてる。現在進行形だ。

ここで軽く咳払い。

あろうことか、俺は思いっきり元気良く手を振り返してやった。

C組の男子たちが雑談を中断しているのが横目からわかる。

ふっはっはっは！ 天下の一匹狼と言えども、女遊びはやぶさかでないのよ！

と、女子と手を振り合っただけで人生を勝ち誇ったように謳歌している俺がいた。

やめる！ 視線が針のように痛い！

そして、隣にいる星野！ なんか喋れよ！

「……………」

「いやいや、無言ってそんな長すぎる必要もないだろ！」

「無言の長さは瑛司に対する軽蔑と比例しているのです」

「無言のままできてくれたほうがよかった！」

嫌な事実を聞いちまったよ……。ていうかやっぱり軽蔑されてたのか　女子に手を振り返したただけだぜ？

「まあ今のは微妙に春らしいといえば春らしいから許すよ。ほら、行ってくれば！」

星野はそう言って文字通り俺の背中を押す。

余計なお世話だと言いたかったが、正直長谷川さんの笑顔に癒されたいと不覚にも思ってしまったのである。その対極的存在、菅原と野口もそこにはいるのだが、天使の前では二体の悪魔も所詮銅像みたいなものだ。

そっぴや、菅原のことも天使って形容したことがあったけな……。いやいやいや。

どう考えても長谷川さんのほうが天使だろ、盲目ってのは怖いぜまったく。

星野の雑なエールを受けて、俺は菅原の席のほうへとこそそそ足を運んだわけだが。

「あらー嘉神瑛司くんじゃないの。お久しぶりね」

やっぱりやりづらいことこの上なしだ。

「野口裕子さんこんにちは」

11文字の言葉の中に、動揺がしつかり刻み込まれてしまっていた。

フルネームで呼んでしまった上（まあ俺もフルネームで呼ばれたわけだし、いきなり野口って言うのもあれだから仕方ないことではあるが）、朝なのに昼の挨拶をしてしまった。

英語のハローみたいにな、こんにちはわ、も全時間帯で使えるようにしてほしいものだ。

もついいや。ここはボケということとで収拾をつけよう。

「皆さんこんにちは」

「おはよう」

「……………」

菅原には無視されると思っていたが、一応の返事はもらえたみたいだ。

だがしかし、せめてつつこみを入れてから正解を出してくれよ……。

「返事がないわね。糞おはよう」

「2回目になると糞がつく仕様ですか！」

「何よ。せっかく素敵な挨拶で返してあげたっていうのに」

「糞がつく言葉で素敵な言葉なんてねーよ！」

あれから一週間経ったつてのに、相変わらず汚い言葉使ってるな。一週間ぶりの最初の挨拶がこれだから余計に酷い。

まあ俺の挨拶もそれに匹敵するくらい酷かったけど。

「やっぱり仲が良いですねーお二人共」

と、長谷川さんは健気に笑ってみせる。

いやもう菅原と仲がどうかどうでもいいや。その笑顔を拝めるだけで俺は生きてきた意味があったと思える。

「わたしが仲良しなのは長谷川さんだけよ！」

「何言ってるのよ！ あたしのほうが夢依と仲良くに決まってるじゃない！」

突拍子も脈絡もなく、菅原と野口は口論を開始する。

ていうか、長谷川さんの人気やばいな……。

これはさすがに、俺の出る幕もない。出たところで突っぱねられるか、最悪無視されるだろう。

「惨敗女は黙ってなさい！ あらゆる分野で負かすわよ！」

「ざ……惨敗女ですって！ 関係ない話を持ち出すんじゃないわよ！」

ここでの惨敗女つてのはたぶん、去年の秋に生徒会会長選挙で野口が惨敗したことを言ってるのだろうけど、記憶のないお前がなんでそれ知ってるんだよ……。まさか、野口との口論のためにわざわざ

ざ弱みを下調べしておいたんじゃないだろうな。

だとしたら相当陰湿な女だよ　お前……。

「まあまあお二人共落ち着いてください。わたしは二人共大好きですよ！」

と、長谷川さんの可憐なフォローが入る。

二人共つてことは、俺は含まれてないんだな……。いやまあ話の文脈からして俺を含むところではなかったのだろうけど。

そもそも、長谷川さんともあの騒動以来話してなかったわけだし、当然といえば当然だ。

うむ、気に病むことはないだろう。

「ところで、嘉神くんは何をしにきたの？」

突拍子もなく、悪気もなさそうに野口はそんなことを聞いてきた。菅原と違って悪意を隠すのが上手いだけかもしれないが、おそらく本来の意味でこんなことを聞いてきたのだろう。

つまりは、一番困るパターン。

何をしに来たって　そんなこと聞かれてもな……。

「罵声を浴びせられに来たんじゃない？　そういうの好きそうだし」

「好きでもないし、好きそうでもない！」

そんなことを暗に示した覚えはないぞ。

まさか、今まで菅原が俺に暴言を吐き続けてたのはもしかしたらそう見えてたからってことはないよな？

「それならわたしたちにとっては好都合極まりないわね。さあ、皆で盛大に罵声を浴びせましょう」

「おい、本当にやめろ！」

野口と菅原が共謀するとかのような結果を導くのか、想像するに難くない。冷や汗たらたらものである。

「まあまあお二人共落ち着いてください。わたしは二人の暴言も大好きですよ！」

煽ってる！

それは煽つてると言うんだよ長谷川さん！

しかし長谷川さんがボケも繰り出せる器用な人とは……。これはもう一人つつこみ役が欲しいところだな。

一端の流れが終わったところでどうにか会話を成立させるべく、俺は口を開いた。

「まあさっきの話に戻すとだな。何をしに来たってわけでもないんだが、お前ら仲良くやってんのかな」と様子を窺ってやろうと思っただけだよ」

多少上から目線で言ってみる。本来のキャラを忘れかけてたところだからな。こちら辺でリセットしておくのがいいだろう。

「余計なお世話ね。わたしと長谷川さんは死ぬほど仲良しよ。あんななんか、心配されるに及ばないわ」

それを言つとさっきの流れがまたやってくると思うのだが……。「ちよつと待ちなさい！ わたしのほうが……ふがつ！」

長谷川さんも俺と同じ思考に達したのか、野口が全てを言い終える前にその口を両手でしっかりと塞いだ。

「二人共大好きだって言ってるじゃないですかー！」

朝っぱらからそんな慣れ合いがあり、いつも通りつまらない授業を受け、そうして放課後を迎えた。

菅原の一件以来、平凡な日常というものがいかに珍重すべきであるか改めて考えさせられることになったわけだが、それでも妙なやりきれない感じが拭えないのはなぜだろうか。

誰しも経験したことがあるだろう、放課後特有のこの鬱な感じ。

正門から微かに見える夕日だとか、部活に青春を捧げている生徒たちの声があると尚更である。

まあそれらは今に限ったことじゃなく、入学以来ずっと身に染みて感じてきたものではあるのだが、こう 2年生になってみて何か大人に近づいていくようなものが迫ってくるのを体感しているのかもしれない。

考えすぎかもしれないが、考えすぎるに越したことはないのだ。

「あ……」

思わず声を漏らしてしまう。菅原魔綾の姿を見かけたからだ。いや、見かけてしまったから、と言ったほうが適切かもしれない。

長いクリーム色の髪を揺らし、毎度の如く不機嫌そうな顔つきで歩いている。

さてどうするか。

朝は長谷川さんと野口がいたからなんとなくあったものの（ろくな会話はしてないが）、二人つきりとなると一週間分の空白がより気まずさを喚起させてしまう。

ふうむ、正門を左に曲がったってことは俺と同じ方向じゃないか。そもそもあいつは電車通学なのだろうか、まあ自転車に乗ってないって時点でそれが濃厚だよな……。

さすがに正門前でうろろろしているわけにもいかず、俺はいつもより数段遅いペースで歩を進める。

「っと！」

正門を曲がった途端、菅原が目の前に降臨した。危うくぶつかるところだったが、俺の持つ全ての筋力を足元にまわし、なんとか体全体を御することに成功した。

「お前何やってんだよ」

平静を装いつつ、表情を一切変えない菅原に聞いてみる。

「ゴキブリのような気配を感じたから止まってみたのよ。そしてその行為を全力で悔いているところよ」

「お前、ゴキブリを見つけたときに捕まえるのを嫌がって放置するタイプの人間だろ」

「いいえ、フルボッコにするタイプの人間よ」

「そんなタイプが存在するのか！」

そりやまあたしかに、ゴキブリはそこの虫とは生命力が段違いだからな……。それでもフルボッコって表現はどうかと思うが……。

「フルボッコにするのも汚らしい相手の場合は、そうね……、見つ

けたことを後悔するわ」

「俺がゴキブリ以下ってことかよ！」

「存在はゴキブリ以下、汚らしさはゴキブリ以上」

「ゴキブリさん！ 今までひどいことをしてきてごめんなさい！」

とまあこんな感じで、そのままの流れで駅まで一緒に帰ることになってしまったわけだ。

まあそうならなかったとしても、駅までこそ後ろを歩いていくななんてのは選択肢になかったし、まあ当然の帰結といえそうなのかもしれない。

しかしまあ気まずいったらないんだよな……。

ふざけたやり取りなら一定時間は保てるのだが、真面目な話がほとんど続かないというあり様だ。駅までの道のり、さすがにずっとつっこむのは体力的にきついし、菅原も菅原で暴言を吐き続けるのも精神的に酷だろう。少なくともそう信じたい。

まあこの流れから推測するに、俺が何か話し始めなきゃならないんだろうな……。まさか俺側から気をつかわなければならぬやつと会うとは思ってなかったぜ。学校では星野や紗月がべらべら喋ってるのに便乗すればいいだけだったし。

それに菅原に関して言えば、常人への一般的な対応が通用しない。あと、心にダメージを受けることは避けられない。

「あんた、家どの辺なんだっけ？」

おっと珍しい。菅原のほうから話をふってくるのは何か俺に不満があるときだけだと思ってたのに。

「学校の最寄から4駅分だよ。遠くもなく近くもないって感じた」

「へえ、本当に遠くもなく近くもないのね。つまらない」

「自分の家の場所を紹介するのにおもしろくしなきゃいけないのかよ」

芸人でもそこまで考えはしないだろう。

よし、そこまで言うならお前はおもしろく答えられるんだろうな。

「で、お前の家はどのへんなんだ？」

「学校の最寄から15キロほどね」

「なぜ距離で答える！」

やばい、ちょっとおもしろいこと言いやがった。

言いたくないがこれは悔しい。

「しかし15キロっていうと、お前も俺と同じく、遠くも近くもない場所に住んでるんだな」

「まーそういうこと。あ、あなたの家の近くに大きな川あるでしょ？」

「あるけど、それがどうかしたのか？」

「わたしの家からも近いのよ、その川」

「はあ」

ってことは同じ方面に15キロってことか。もしかすると隣の駅かもしれない。しかし駅名を言わないのは何か理由があるのだろうか。

まあたぶんないんだろうけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1547q/>

マーヤの記憶

2011年8月5日03時10分発行